

ドストエフスキイ研究会便り（9）

カラマーゾフの世界

(A).兄弟たち、スメルジャコフを巡って

— スメルジャコフとマリアとアリョーシャ —

4. 噛み砕かれたアリョーシャの指 【第四章3より】

はじめに

我々が今まで検討してきたイワンやスメルジャコフ、そして次回に取り上げるドミートリイなど、その内に脈打つカラマーゾフ的生命力を激しく生きる他の兄弟たちと較べて、主人公の末弟アリョーシャはもの静かで穏やかな信と愛の人であり、他人を批判したり裁いたりすることはまず滅多にない。この青年のことを中性的で生彩がないと評する読者や評者も少なくない。だがそうであろうか。本章はこの物静かな信と愛の人が持つ強さを追ってみたい。

信と愛の人が持つ静けさと強さ。このことが最もよく現われ出るのは、まずは作品の始めに紹介される彼の出家を巡る顛末である。「俗世の憎悪の闇から愛の光に向かって身を引き剥がそうと」しての出家。その際青年アリョーシャが示す「一切か無か」の烈しい絶対排中律の精神は、我々読者の精神を揺さぶらずにはいない。作者ドストエフスキイはこの青年の烈しい求道精神を、ゾシマ長老との出会いを介し、遙か遠く福音書における十字架上のイエスにまで連なる精神として位置づけ、更にそれを「キリストの愛」「実行的な愛」、あるいは「一本の葱」として表現する。この作品を根底で貫く強靱な精神である (2・4)。

アリョーシャの「実行的な愛」。それはイリュージン少年の苦しみに寄り添うアリョーシャの姿の内に確認されるであろう (1・3・5)。そしてこの作品の終局に描かれるアリョーシャの「告別説教」(6)。—— 亡きイリュージンの石の前で少年たちに「素晴らしい永遠の思い出」を説く彼の言葉と、それに応える少年たちの「カラマーゾフ、万歳！」の叫び。この誰もが胸を打たれる感動的な「告別説教」の背後には、「実行的な愛」の人アリョーシャその人が存在し、更には彼の魂を襲った「激震」が隠されている。この時アリョーシャが念頭に置くのは、「ジューチカ事件」や「垢すりへちま事件」を始めとする悲劇的悪魔的な事件を通して、自らを地獄の底に追い込んだイリュージン少年の絶望と苦悩であり、またここにはイリュージンの苦しみと連なるスメルジャコフの罪を見つめ、更には長兄ドミートリイの罪を見据えるアリョーシャの厳しい眼も存在することが確認されるであろう。

つまりこの青年が我々に指し示すのは、改めて「罪なくして涙する幼な子」という『カラマーゾフの兄弟』の根底に響き続ける通奏低音であり、そこから響いてくるのは運命の理不尽と残酷さの内に投げつけられたイリュージンとスメルジャコフに向ける、アリョーシャの信と愛の強さに他ならない。

4. 嘸み砕かれたアリョーシャの指 [第四章3より]

目次	ページ
1. アリョーシャを狙って —「これで十分だね？」—	2～4
2. イワンからアリョーシャへ —「罪なくして涙する幼な子」への眼—	4～12
3. 「垢すりへちま事件」 —父と子の受難—	12～18
4. 「平等」であること —アリョーシャとリーザが担う使命—	19～22
5. 「ジューチカ事件」 —イリュージンとスメルジャコフ—	23～32
6. アリョーシャの告別説教 —死からの復活の条件—	33～36

1. アリョーシャを狙って —「これで十分だね？」—

投石合戦

アリョーシャがホフラコワ人宅に向かう途上のことである。掘割を隔てて、下校途上の少年六人と一人が睨み合っている。一人だけ向こう側に立つ少年はどうやら十歳にも届かず、青白く病気持ちのようだ。アリョーシャが少年の集団に話しかけると、対岸から石が飛んでくる。少年たちの一人が投げ返すや、直ちにまたも対岸から石が飛び、今度はアリョーシャの肩をしたたかに撃つ。向こうの少年のポケットには石が一杯に詰め込まれているらしい。

「あれはあんたを狙ったんだよ。あんたをね。わざとあんな風にぶつめたんだよ。だって、あんたはカラマーゾフ、カラマーゾフでしょう？」(四三)

一斉に投石合戦が開始される。対岸の少年の頭に一つが命中し、少年は一瞬倒れるが直ちに跳ね起き、狂ったように応戦してくる。少年たちを制止するアリョーシャの背に再び石が当たる。やはり向こうの少年は石を沢山持っていて、その石を少年たちだけではなく、アリョーシャも狙って投げているらしい。夢中で石を投げ返す少年たちが上げる叫びから、アリョーシャには幾つかのことが明らかになる。まず掘割の向こうの少年がこの日学校で、少年たちの仲間のコーリヤ・クラートキンをペン・ナイフで突き刺し、血を流させたこと。次にこの少年がアリョーシャを知っていて、石をぶつけようとしていること。そしてその理由はこの少年に、「ぼろの垢すりへちまを好きか？」と聞きさえすれば分かること。

投石合戦は一段落する。アリョーシャは少年たちを残し、掘割の向こうにいる少年を目指して橋を渡ってゆくのだった。

「これで十分だね？」

少年は、向こう側の掘割に沿った坂の上に立ち、身動きもせず待ち構えていた。やはり年齢はせいぜい九歳ほど、痩せて細長い顔は青白く、背の低い虚弱そうな少年だった。アリョーシャを睨みつける黒い目には敵意がこもっている。相当古ぼけた外套からは不格好に身体がはみ出し、両袖からは手が剥き出しになっている。ズボンの右膝には大きな継ぎが当てられ、右の長靴は爪先の親指の辺りに大きな穴が空き、そこにはたっぷりとインクが塗られているようだ。外套の膨らんだ両ポケットには、案の定石が詰め込まれていた。

アリョーシャの目から、彼が殴る気持ちがないことを知ると、少年は口を開いた。「こっちは一人なのに、あいつらは六人なんだ・・・僕一人でみんなやっつけてやる」。「でも石が一つ、ひどく当たったね」。「僕だって、スムーロフの頭にぶつけてやったよ!」。「あの子たちが言っていたよ。君は僕を知っていて、何か訳があって石をぶつけたんだってね? [略] 僕は君を知らないけれど、本当に君は僕を知っているのかい?」。

筆者も記すように、どんな幼い子供たちに対しても、隔てなく自然に語りかける天性に恵まれたのがアリョーシャである。だが少年は、このアリョーシャから発せられる穏やかな問いにも一切取り付く島を見せない。その場を去りかけるアリョーシャの背後から、またもや大きな石が投げつけられ、その背をしたたかに撃つ。「君は、後ろから狙うのかい?」。逆上した少年は、今度は正面からアリョーシャ目がけて石を投げつけてくる。だがこの石は身構えたアリョーシャの肘に当たっただけであった。

「よくも恥ずかしくないね! 僕が君に何をしたんだい?」(四三)

相手が飛び掛かってくるものと待ち受けていた少年は、その気配がないのを察すると突然野獣のようにいきり立ち、逆にアリョーシャを目がけて飛び掛かり、頭を下げて相手の左手を掴むや、その中指に噛みつき、歯を立てたまま十秒ほど離そうとしなかった。アリョーシャが悲鳴を上げ、力任せに指を振り払おうとすると、少年はようやく噛みついた指を離し、前と同じ距離まで飛びのくのだった。指は爪のつけ根あたりを骨に達するほどまでにしたたかに噛まれ、血が流れ出していた。アリョーシャはハンカチを取り出し、傷ついた指を固く結びにかかったが、結び終わるのにたっぷり一分ほどが必要だった。少年は突っ立ったまま待っていた。

アリョーシャは穏やかな眼差しを少年に向け、語り掛けるのだった。

「さあ、これでいい。見てごらんよ、ひどく噛んだね。さあ、これで十分だね? じゃ今度は教えてくれるね。僕は君に何をしたんだい?」(同上)

驚いて見つめる少年に向かい、アリョーシャが再び穏やかに自分が何をしたのか問うた時である。少年は突然大声で泣き出し、その場から走り去ろうとするのだった。その後からゆっくりと随いてゆくアリョーシャを少年は決して振り返らず、速度を速めることも緩

めることもせず、恐らくは大きな声で泣き続けたまま、遠くに走り去ってゆくのであった。その姿を見守りながら、アリョーシャは堅く心に誓うのだった。あの少年を探し出し、自分の心を震撼させた謎を明らかにしなければならない。

2. イワンからアリョーシャへ —「罪なくして涙する幼な子」への眼—

イワンからアリョーシャへ、

「さあ、これで十分だね?」。骨にまで達する噛み傷から流れ出る血を示しながら、穏やかな眼差しでアリョーシャがイリュージン少年に語りかけたこの言葉こそ、アリョーシャという存在の一切を雄弁に物語る言葉と言えよう。結論の先取りのようになるが、これはアリョーシャ一人の言葉に留まらず、ゾシマ長老と十字架のイエスを背後に置いて、運命への呪いと復讐心に捕えられた不幸な存在に向かって発される、『カラマーゾフの兄弟』全篇を支える土台石とさえ言い得る言葉であろう。

イワンが「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」を以って指し示すのは、世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちの存在である。そして我々が繰り返し確認してきたように、この青年の異母兄弟であり下男であるスメルジャコフこそ、イワンが直接現実の中で直面した「罪なくして涙する幼な子」に他ならない。だがスメルジャコフを前にしたイワンは、最終的にはこの異母兄弟の悲劇性をも悪魔性をも受け止めることが出来ず、それらに呑み込まれてしまったのであった。イワンに代って、スメルジャコフの悲劇性と悪魔性の前に正面から立つのはアリョーシャである。——我々はこのような視野の下に考察を続けている。そしてここに一人、新たにイリュージンという「罪なくして涙する幼な子」が登場し、この少年に対しても正面から向き合うのがアリョーシャなのだ。

神殺しとイエス磔殺、そして父親殺しと兄弟殺し。これら何重にもわたる罪を犯した末に人格を崩壊させ、遂には「死の床」に沈んだイワン。作者ドストエフスキイがこの青年を、やがてその罪の赦しと復活の光の中に立ち上がらせるであろうことは、前回の終わり、アリョーシャの祈りを通して確認した通りである(第3章^[6])。だが「死の床」から起こされた後にイワンが生きるであろう生を、既に前篇、家畜追込町の現実において生きているのが弟のアリョーシャであると言えよう。イリュージン少年とのやり取りから明らかのように、ドストエフスキイはこの青年アリョーシャを、「実行的な愛」を生きる信と愛の人として提示したと考えられるのだ。

だがこのような使命を担う主人公を、ドストエフスキイは具体的に如何なる人間として造型しているのか。つまりアリョーシャの成長史と精神的背景を如何なるものとして提示しているのか。今まで我々は、作者が次々と提示するスメルジャコフの出生やその後の様々なエピソードを検討し(第1・2章)、またイワンのモスクワにおける精神史も検討し(第3章)、その上で二人の出会いから対決に至るドラマを検討してきた。同様にアリョー

シャについても、まずはドストエフスキイが提示する基本的情報を整理し、その上で改めてイリュージョンとの交流を辿ることで、そこから如何なるアリョーシャ像が浮かび上がるか、追ってみよう。

アリョーシャの天性

注目すべきはドストエフスキイがこの物語の語り手たる筆者に、小説が始まったばかりの第一篇において、アリョーシャの人生の出発点のことを丁寧に描き起こさせていることだ。その要点をまずは確認しておこう(詳しくは拙著『カラマーゾフの兄弟論—砕かれし魂の記録—』Ⅲ 2・3)。

筆者は兄のイワンが、既に十歳の頃から自分が他人の世話になっていることを苦しめ、このことが大学時代まで尾を引き、その思想形成に少なからぬ影響を及ぼしたと指摘する(一3)。これとは対照的に弟のアリョーシャの方は、「自分が誰の金で暮らしているのか、一度として心を配ったことがなかった」とされる。筆者は更に地主のミウソフに、この青年が見知らぬ大都会に無一文で投げ出されたとしても、誰かが見捨ててはおかず、決して飢えさせることも凍えさせることもしない「世界でただ一人の人間」であろうと語らせ、この青年に関しては、生活のための苦しみということがそもそも問題として成立しない稀有な存在であるとまで言われるのである(一4)。またこの青年は決して他人を裁いたり批判したりすることがなく、「一切を赦しているように思われる」とされることにも注意すべきであろう。実際アリョーシャが故郷に現れるや、「好色漢」で「卑劣漢」で、また瀆神的「道化」の雄である父親のフォードルでさえ、二週間も経たぬ内に、息子に対して心底から愛情を抱くようになったとされるのだ(同上)。このように冒頭から主人公のアリョーシャ像は、「明日のことを思ひ煩ふ」(マタイ六25) ことのない「幼な子」、あるいは「宗教的痴愚」の魂を持つ「天使」のような存在として刻まれるのである。

「ロシアの小僧っ子」アリョーシャ

アリョーシャが帯びる深い宗教性について、筆者はこれを正面から取り上げ、彼が「根本のないわば自然発生的な信」の人であり、また「生来誠実で、真理を求め信じる人間」であると規定する。また筆者はアリョーシャがひとたび真理を信じるや、そのための「勲功」を成し遂げるべく、厭わず「全てを、命さえをも犠牲に捧げる」ような「現代青年」であること、そしてこの真理探究に燃える青年が、「神と不死」を求めて「出家」さえ決心したことを告げる。注目すべきことは、アリョーシャの出家の動機がほぼ同じ表現で二度にわたって記され、読者の注意が促されることだ。

「その時、そのことだけが彼に感動を与え、俗世の憎悪の闇から愛の光に向かつて身を引き剥がそうとしていた彼の魂の、いわば究極の理想と思えたからである」(一4, 5)

アリョーシャとは「俗世の憎悪の闇」から「愛の光」に向かおうと切望する若者、そのためには「命を投げ出す」ことをも厭わず、出家を「究極の理想」とさえ考える真摯な十九世紀ロシアの求道青年、つまりは「ロシアの小僧っ子」だとされるのである。

イエスの呼び声

殊に注目すべきことは筆者が、「ロシアの小僧っ子」アリョーシャの出家の動機を、イエス・キリストの呼び声に応えたものとして提示することだ。つまり筆者はまず「真理」を求める青年アリョーシャが、「真剣に思いを巡らせた」末に「不死と神とは存在する」という確信に到って「愕然」とし、「自分は不死のために生きよう、中途半端な妥協は受け入れられない」と自らに言い聞かせたと記す。次いで筆者は、この「不死と神」の問題に対するアリョーシャの姿勢が「一切か無か」の厳しい排中律の姿勢であったこと、それがイエス・キリストを向こうに置いてなされた不退転の決意に基づくものであったことを示すべく、この青年が次のようなイエスの言葉と出会ったと記すのである。

「なんぢ若し^も ^{まった}全からんと思はば、^{おも}一切を^{いっさい} ^{わか}分ち^{あた}與へよ、^{きた}かつ^{われ}來りて^{したが}我に從へ」(一五)

青年はこのイエスの言葉と向き合い、次のように自らに言い聞かせたとされる。

「《一切》の代わりにニルૂブリを与えて誤魔化したり、《我に從へ》の代わりに礼拝式に通うだけにしたりすることなど、僕には出来ない」(一五)

イエスの言葉と向き合うアリョーシャは、更に次のような問いを自らに投げかけ、ただその確認のためだけに故郷に向かった可能性もあると記される。

「そこでは《一切》[を与えているの]か、それともそこでも《ニルૂブリ》[しか与えていないの]か？」(一五)

「ただ然り然り、^{しか} ^{しか}否^い ^{ない}否といへ、^{これ} ^{すぐ}之に過るは^{あく}悪より^い出づるなり」(マタイ五 37)。絶対の排中律、二者択一の厳しい選択を迫るイエス・キリストに応え、神の前に「全からん」者となるべく、アリョーシャはモスクワを去り、「そこ」つまり故郷の家畜追込町に向かい、遂にはこの町の郊外にある修道院で禁欲と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守り続けるゾシマ長老と出会うのである。以上の情報だけでも既に、ドストエフスキイ文学の中で稀有とも言うべき一青年の成長史が、つまり「神と不死」を求める真摯な求道青年誕生の、コンパクトであるが見事な精神史が提示されたと言えるであろう。ここにあるのは、決して中性的で生彩のない青年像ではない。

帰郷、母の墓探し、アリョーシャの精神の根

ところでアリョーシャが帰郷を思い立った直接の動機について、筆者はそれが母の墓探しであったと記す。アリョーシャの心には、彼が二歳の頃のある思い出が強く焼き付けられていたのだ。—— 静かな夏のある夕方、沈みかけた太陽の斜光が射し込む中、灯明の灯る祭壇の聖像の前に跪いた母が、幼いアリョーシャを両腕で強く抱きしめ、ヒステリーを起こしたかのように泣きじゃくり、叫び声を上げながら聖母マリアに祈っている。「狐憑き」と呼ばれる母は聖母の庇護を求めるかのように、両手で抱きしめた息子を聖像の方に差し伸べる。そこへ突然乳母が飛び込んできて、怯えたようにアリョーシャを母からもぎ放してしまう（一四）。

彼に帰郷を促した直接の動機が、この母の墓探しであったことも十分に理由があったと言えるであろう。だがこの青年は、生前の母を愛してくれた下男グレゴリーイの導きで墓を探り当てた後は、墓にも母にもそれ以上の関心を示した形跡はない。作品の冒頭で筆者が刻もうとしたのは、アリョーシャの母の墓探しそのものというよりは、主人公が宗教的痴愚の母から聖母マリアとイエスに捧げられた存在であることを示すため、つまりこの求道青年誕生の背後にある宗教的奥行きへの提示のためであると考えの方が真実に近いであろう。そして事実彼は、母の導きでゾシマ長老と出会い、そのゾシマの導きで「キリストの愛」、隣人愛の実践の道に踏み出してゆくことになるのである。

再度確認しておこう。「根本的ないわば自然発生的な信」の人アリョーシャが、成長と共にイエスの呼び声に応え、「一切か無か」の精神を以って「神と不死」探求の旅に乗り出すドラマとは、「狐憑き」とされた母に導かれ、その墓探しのために訪れた故郷の修道院で、遂に「キリストの御姿」を守るゾシマ長老との出会いに至るといふ、母の祈りの実現のドラマでもあるのだ。我々はここに「ロシアの小僧っ子」アリョーシャ、信と愛の人アリョーシャ誕生の大きな流れを、筆者から受け取るべきであろう。

ゾシマの兄マルケルとアリョーシャ

アリョーシャの人生における決定的な出来事、つまりゾシマ長老との出会いの後、一年にわたりこの青年が育んだ師に対する信と愛、「初恋とも似た」と記される長老への熱烈な傾倒ぶりについては（一四）、ここで詳しく扱う余裕がない。だが我々はここでは逆に、ゾシマ長老その人がアリョーシャをどのように受け止めていたか、この視点について確認しておこう。このことでアリョーシャが置かれた精神史的文脈が改めて明らかとなり、我々はより一歩明瞭なアリョーシャ像に近づけるであろう。

ゾシマ長老の死の夜のことだ。アリョーシャがイワンとの対決を終えて修道院に戻った頃、その日衰弱のため終日殆ど眠り続けていた長老は、奇跡的に再び意識を取り戻していた（六1）。長老はその後死が訪れる瞬間まで、時おりの中断を挟みつつ、数人の親しい人々と最期の歓談を交わす時を与えられたのである。このゾシマがアリョーシャの顔を見るや

語り出したのは、八歳年上の兄マルケルのことであった。

十七歳にして奔馬性結核で世を去ったマルケルは、死を間近にして突如自らの罪深さに気づく。つまりマルケルはそれまで自分が周囲の自然や動物たち、そして召使いや肉親たちなど、神の愛と栄光と美に満ち溢れるこの世界のことに全く目も心もやらず、何ら愛を注ぎ返すことがなかったことを、この上ない罪として自覚するに至ったのだ。彼は自らの罪のことで召使いや小鳥たちにさえ赦しを請い、人生が樂園であることを説き、そして人生を祝福しつつ最期の時を迎えたのである。「我々人間は誰でも、万人万物に対して、一切のことで、罪があるのです、しかし最も罪深いのは自分です」「人生は気づけば樂園なのです」「人間が幸福を知り尽くすには、一日あれば十分です」。—— 兄マルケルのこれらの言葉は少年ゾシマの心に刻まれ、その後の生涯を通して彼を支え続けたのである。ゾシマが語ったこれらマルケルの短い生と言葉とは、ゾシマの死後アリョーシャが編纂する「ゾシマ伝」の冒頭に置かれるであろう(六2 A)。

アリョーシャが修道院に戻り、ゾシマ長老の庵室に顔を出した時ゾシマは、このアリョーシャの顔が兄マルケルのことを思い出させたのだと語り出す。だがゾシマによれば、二人の顔立ちそのものはそう似ているわけではなかった。アリョーシャが兄にそっくりなところとは、その精神だったのである。人生の終わりに臨んで、兄マルケルがアリョーシャの姿をとり「回想と洞察のために」訪れてくれたに違いない。ゾシマは二人の顔について、このような夢想をしていたのだと語る。アリョーシャからゾシマへ、ゾシマからマルケルへ、そしてマルケルから神へ。—— 『カラマーゾフの兄弟』を垂直方向に貫く聖なる系譜が、ここに新たな奥行きと展望を与えられる。

「俗世で修道士としてあり」「神の民を愛するのだ」。師ゾシマのこの遺訓を受けてアリョーシャが修道院を出るのは、その死から三日後のことだ(四1、六1、七4)。アリョーシャがこの新たな旅に携えるべき「杖」としたゾシマ長老の遺訓、その教えについてもここで確認をしておこう。

ゾシマの遺訓、罪人への愛

「最も罪深い人間をこそ、誰よりも愛するのだ」(一5)。これがアリョーシャの師ゾシマ長老が死に至るまで一貫して強調した、福音書のイエスに土台を置く長老の信仰のエッセンスと言えるであろう。

「^{すこや}健かなる^{もの}者は、^{いしや}医者^{えう}を要せず、^{やまひ}ただ病^{もの}ある者、これを^{えう}要す。我は^{われ}正^{ただ}しき^{もの}者を^{まね}招かんと^{つみびと}あらで、^{まね}罪人を招かんとて^{きた}来れり」(マルコ二17)

ゾシマ長老の教えの拠って来たるのはこのイエスの精神であり、更にそこには先に見た兄マルケルの精神が重ねられ、それがアリョーシャの心に伝えられたと考えられる。「この世にまるつきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してし

まいたかったです」(五 2)。己の運命の理不尽さと醜悪さへの怒りと憎悪から、イエスに向かってこの呪いの言葉を投げつけるスメルジャコフとは対照的に、イエスに発する病人や罪人への愛、十字架に極まるイエスの生と死、つまりは「キリストの愛」を心に刻んで生きるのがアリョーシャである。『カラマーゾフの兄弟』の最深部にドストエフスキイが置いた基本骨格、あるいは対立構図がここに確認されよう。

「キリストの愛」、「実行的な愛」、「一本の葱」

ところでアリョーシャに関わるキー・ワードの中で、「キリストの愛」と「実行的な愛」と「一本の葱」、これら三つの言葉が示す意味とその奥行きについてもここで確認しておくことにしよう。これらはゾシマ長老からアリョーシャに伝えられた精神を理解する上で、またスメルジャコフやイリュージョンを始めとする「罪なくして涙する幼な子」たちばかりか、「万人万物一切」に対するアリョーシャの信と愛の在り方を理解するためにも決定的に重要なものであり、曖昧な概念として放置しておくことは許されないであろう。

まずはこれらが用いられた文脈であるが、「キリストの愛」は「大審問官」の劇詩を挟んで、イワンとアリョーシャとが対決する際に登場する語であり(五 4・5)、「実行的な愛」は「場違いな会合」において、ゾシマ長老がホフラコワ夫人に語る言葉の中で用いられる(二 4)。更に「一本の葱」は、長老の死を契機とするアリョーシャの一連の回心体験の中で、グルーシェニカ訪問の際と、それに続く「ガリラヤのカナ」の夢において登場するものである(七 3・4)。以下で順次、それらの意味と奥行きについて確認してゆこう。

「キリストの愛」

「キリストの愛」については、前回イワンの精神史を検討した際に確認してある(第 3 章²-3)。ユークリッド的知性によっては神の認識は不可能であることを悟ったイワン。彼の前に広がる世界とは、「罪なくして涙する幼な子」たちの受難が繰り返されるだけの世界でしかなかった。その苦しみを贖う存在をどこにも見出すことの出来ないイワン。「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」のみが駆け巡る荒涼索莫たる不条理の世界を前にして、彼が出会ったのが福音書のイエス・キリストであった。この荒漠たる世界において、イエスとは神を愛として捉え、あるいは愛の神に捕らえられ、その神の愛を十字架上で磔殺されるまで貫き生きた存在であった。イワンを捉えて離さない悪魔の否定の精神も、このイエスの存在と「キリストの愛」だけは認めざるを得なかったのである。「ロシアの小僧っ子」イワンの知性が持つ誠実さ、そしてその心が持つ熱さと言うべきであろう。ルカ福音書が記す十字架上のイエスを凝視し、その「キリストの愛」に感動するイワンについて、またこの「キリストの愛」を巡って、「大審問官」の劇詩を挟みイワンとアリョーシャとが繰り返す対決についても、我々は前回確認したのだが(第 3 章²)、「キリストの愛」に関するこの青年の理解の深さは驚くべきものである。だが最大限に注意すべきは、これも前回確認したのだが(同上)、その後イワンが辿った道とはこの「キリストの愛」さえも斥ける悪

魔道であり、彼は最終的に「地質学的変動」の人神思想に至るのだ。その帰結が「死の床」に沈むイワンである。だが今はアリョーシャと同じくイワンの内にもまた、「キリストの愛」に心を震わせる「ロシアの小僧っ子」が存在するという事実を確認するに留めよう。

「実行的な愛」

「実行的な愛」。これについても我々は前回、イワンとの関係で扱っている（第3章^[2]）。富と地位と美貌に恵まれたホフラコワ夫人が表明したニヒリズム、死の恐怖を如何にすべきかとの問いにゾシマ長老が応え、「空想的な愛」ではなく「実行的な愛」の必要性について説く場面である。長老の言葉もここで再度確認しておこう。

「実行的な愛の経験によってです。自分の隣人たちを飽くことなく実際の行動によって愛するように努めるのです。その愛の努力が実りをあげるにつれて、神の存在にもあなたの靈魂の不滅にも確信が持てるようになるでしょう。隣人愛における完全な自己犠牲の段階にまで至った暁には、その時こそあなたは疑う余地なく[神の存在も靈魂の不滅も]信じるようになり、最早如何なる疑いもあなたの心に忍び寄ることが出来なくなるでしょう。これはもう経験ずみのこと、確かなことなのです」（二四）

既に確認したように、このゾシマ長老の言葉は直接的にはホフラコワ夫人へのアドバイスであるが、同時にドストエフスキイが細心の構成意図を以って配置した、イワンと彼が代表する近代的合理主義精神が孕むニヒリズムに対する、ドストエフスキイ自身の正面からの批判であり、また処方箋でもあると考えるべきであろう。たとえ人は如何なる絶望の底に追いやられようとも、「空想的な愛」に逃げるのではなく、現実の生において「実行的な愛」の道を一步一步踏み重ねることによって初めて「神と不死」への確信が与えられる。この「実行的な愛」あるいは「隣人愛における完全な自己犠牲」という言葉を語るゾシマ長老が土台とするのは、「善きサマリヤ人」の譬え(ルカ十 30-37)を語ったイエス・キリスト、十字架上で磔殺されるに至るまで神と隣人への信と愛を貫いて生きたその姿と考えるべきであろう。その点でこれは十字架に極まるイエスの生と死、つまりは「キリストの愛」と重なり、それを具体的に表現した言葉と考えられよう。

「一本の葱」

「キリストの愛」の具体的な表現としての「実行的な愛」。これは更に「一本の葱」という極めてユニークな語としても登場する。つまり師ゾシマ長老の死を契機として、アリョーシャが体験する一連の宗教体験において（拙著『カラマーゾフの兄弟論』VII A 1-3を参照）、「一本の葱」とは「キリストの愛」と「実行的な愛」を更に具体的に表現する言葉として用いられるのである。——ゾシマ長老がその死後発した余りにも早く余りにも強烈な

死臭。信よりも奇跡を望む人々、聖者の失墜を喜ぶ人々によって絶望の底に投げ込まれたアリョーシャは、グルーシェニカから与えられた「一本の葱」によって再び「起ち上がる」。このアリョーシャが修道院に戻り、師ゾシマの棺の傍らで見る「ガリラヤのカナ」の夢（ヨハネ二1-12）、この祝宴の場にはイエスの脇で彼を呼び招くゾシマ長老がいた。

「なぜ私を見て驚くのだ？ 私がここにいるのは一本の葱を与えたからだ。ここにいる人たちの大部分も、たった一本の葱を与えたに過ぎない。たった一本ずつ、しかも小さな一本の葱を・・・我らの仕事はどうなっている？ もの静かでおとなしい私の少年よ、お前も今日餓えた女に一本の葱を与えることが出来た。始めるのだ、倅よ、自分の仕事を始めるのだ。おとなしい少年よ！ 我らの太陽が見えるか、お前にはあのお方が見えるか？」（七4）

「ガリラヤのカナ」の婚宴。「我らの太陽」イエス・キリストが与える喜びのブドウ酒の祝宴に招き入れられる唯一の条件とは、アリョーシャを呼び招くゾシマ長老によれば、「餓えた」人に「小さな一本の葱」を与え、また逆に与えられるという「我らの仕事」を果たすことに他ならない。この「一本の葱」とは、「場違いな会合」でゾシマ長老がホフラコワ夫人に語り聞かせた「実行的な愛」のことであり、また「大審問官」の劇詩を挟んでイワンとアリョーシャとが「キリストの愛」と呼んだものであり、更に福音書の磁場に溯れば、ルカ福音書でイエスが語った「善きサマリヤ人」の譬えにおける「隣人愛」に他ならない（ルカ十25-37）。アリョーシャからゾシマ長老へ、ゾシマ長老とその兄マルケルからイエス・キリストへ、そしてイエス・キリストから神へ。『カラマーゾフの兄弟』を垂直に貫く聖なる系譜、「隣人愛」の系譜が「一本の葱」「実行的な愛」、そして「キリストの愛」という縦糸によって織りなされていることが、ここに確認されよう。

修道院を出て

先に見たように、師ゾシマ長老の死を契機とする一連の宗教体験の三日後、アリョーシャは修道院を出る。「俗世で修道士としてあり」「神の民を愛するのだ」という長老の遺訓を受けてのことだ（四1、六1、七4）。家畜追込町で一人在俗の生活を始めた彼は、婚約者のリーザやその母のホフラコワ夫人、また誤認逮捕された長兄のドミートリイやグルーシェニカ、そしてカチェリーナなどを足繁く訪問しては彼らの言葉に耳を傾けてやっている（十一1-5）。父親殺しの後、それぞれの「悪業への懲罰」に曝されつつあるイワンとスメルジャコフとの交流については、我々が第一回目から最終回の第6章まで検討を続けるテーマであるが、前回の最後ではアリョーシャの祈りに注目し、そこに表現された二人の兄に向けるアリョーシャの冷静な眼と、また二人に寄り添う彼の熱い心、そして何よりも彼の神への信と愛を確認したのであった。

「キリストの愛」「実行的な愛」、そして「一本の葱」。修道院を出たアリョーシャに仮託

してドストエフスキイが着手したのは、理不尽で醜悪な運命に苦しむ人々、つまりは「罪なくして涙する幼な子」たちの涙と血と痛みを、これらの愛を以って癒し鎮め得る人間が果たしてこの世に存在し得るのか否か、そうだとすれば如何なる形においてか、このような問いとそれへの答えの試みであると考えられる。神からイエスへ、イエスからゾシマへ、そしてゾシマからアリョーシャへ。我々が確認してきた「実行的な愛」の系譜が、今度はアリョーシャからイリュージンへと如何に伝えられるのか、「さあ、これで十分だね？」という問いが果たして少年の心の底に届くのか。家畜追込町におけるイリュージン少年とアリョーシャとの出会いは、このような視野の下に捉えられるであろう。

3. 「垢すりへちま事件」 一父と子の受難一

アリョーシャに石を投げつけたばかりか、彼の中指の爪のつけ根あたりを骨に達するまで噛みつき、血を噴き出させた末に、大声で泣きながら走り去ってしまった少年イリュージン。我々はまだこの少年のアリョーシャに対する怒りと悲しみの拠って来たる理由、アリョーシャが言う「謎」を具体的に突き止めてはいない。注目すべきことに、少年たちの石投げ合戦から、アリョーシャと少年との短い「対決」、そして少年の逃亡に至るまで、筆者の叙述は一貫してアリョーシャの視線に沿ってなされている。筆者は少年イリュージンにまつわる「謎」のほぼ全てを、アリョーシャがそれらに順次触れさせられ、彼の心に開示される形で刻んでゆくのだ。スメルジャコフにまつわる「謎」が作品の各所に様々な形で提示されてゆくのと同様に、作者ドストエフスキイの筆はイリュージンにまつわる「謎」をもまた、様々な登場人物の証言によって、アリョーシャにクレッシェンド的に提示し、開示してゆくのである。ここにあるのもドストエフスキイの周到な作品構成と、それを支える具体的細部の積み重ねである。我々も出来るだけアリョーシャに寄り添う形で、以下に「垢すりへちま事件」についての情報を（1）から（6）まで追いつつ、イリュージン少年の「謎」へのアプローチを試み、この少年の心の内に吹き荒れる嵐の全貌を理解すべく努めよう。

「垢すりへちま事件」（1） 一フォードルとドミートリイの証言から一

退職二等大尉のスネギリョフとその息子イリュージンが、カラマーゾフ家の長兄ドミートリイによって恥辱の底に突き落とされる「垢すりへちま事件」。これはともすれば見過ごされてしまいがちであるが、『カラマーゾフの兄弟』の冒頭近くからエピローグまで、全篇を通じて一つの主要通奏低音として響き続ける痛ましい出来事である。それはアリョーシャの前で、また直接アリョーシャに対して、様々な場で様々な人物によって言及がなされ、筆者はこの事件が人々の心に及ぼした影響と、アリョーシャに与える衝撃とを伝え続ける。そこから浮かび上がるのはイリュージンとスネギリョフ父子、またその向こうにいるスメ

ルジャコフの存在、つまりは家畜追込町の現実の中に生きる「罪なくして涙する幼な子」たちの存在である。

さてこの事件についてアリョーシャが初めて知るのは作品が始まって間もなくの第二篇、既に何度か見てきたあの「場違いな会合」の場においてであり、父親フォードルと長兄ドミートリイの口からである。まずはここから見てゆこう。

『カラマーゾフの兄弟』の主要人物の殆んど全員がゾシマ長老の庵室に集結し、それぞれが抱える問題を曝け出す「場違いな会合」（第二篇）。この場にドミートリイが遅れて最後に登場するや、彼と父親フォードルとの間には直ちに激しい罵り合いが開始される。この時、一同を前にフォードルが暴露するのが、ドミートリイとスネギリョフとの間に起きた一つの事件である。フォードルによれば三週間前、料亭の「みやこ」でドミートリイが、スネギリョフの顎髭を掴んで往来に引きずり出し、公の面前でひどく殴りつけたのだという。当のドミートリイもこの事実自体は否定せず、自らの「野獣のような振る舞い」を後悔し、「遣り切れない思い」に捉われていると述べはするものの、その原因は全てフォードルの側にあるとし、次のような事情の説明を試みるのである。

それによれば、父親に対して母の遺産を後からあとへと請求し続けるドミートリイを威嚇するため、フォードルはスネギリョフを代理人としてグルーシェニカの許に送ったのだ。フォードルの意図とは、もしドミートリイが更に金を要求し続けるならば、グルーシェニカにドミートリイの手形（借用証書）を渡し、彼女がその手形を盾にドミートリイを刑務所に送り込むぞと脅させることであり、代理人としてのスネギリョフの仕事は、この依頼を伝えることであった（二六）。「垢すりへちま事件」の背後にあったものとは、イワンの言葉を用いれば、カラマーゾフ家の「二匹の毒蛇の戦い」（三九）、金と女を巡る家長と長男との骨肉相食む争いだったのである。

「垢すりへちま事件」（二） —ドミートリイの「告白」から—

「垢すりへちま事件」が次に言及されるのは、ドミートリイ自身の口からである。「場違いな会合」の後のことだ。ドミートリイはアリョーシャを相手に、婚約者カチェリーナとの出会いから婚約へと至る経緯、そして新たなグルーシェニカとの出会いと彼女への愛、更には彼女を巡る父親フォードルとの争い等々について延々と「告白」を続ける（第三篇 3・4・5、「熱烈なる魂の告白」）。その際にドミートリイは、自分がスネギリョフを往来に引きずり出し、その顎髭を掴んで引きずり回した「垢すりへちま事件」について、改めて言及するのである。だがこの時ドミートリイは、自らの「野獣のような振る舞い」について口にはするものの、最早自らの振る舞いに対する後悔の情を表明することはない。新たな恋の囚われ人となった彼には、恋敵たる父親の使い走りをする退職官吏など、最早眼中になかったのだ。この時「垢すりへちま事件」についてアリョーシャが如何なる反応をしたか、筆者は記さない。我々は彼の兄に対する宣告を作品の終局、「エピローグ」において見出すであろう（本章^[6]）。

「垢すりへちま事件」(3) —カチェリーナの説明から—

「^{ナドルイフ}激情の噴出」

「垢すりへちま事件」が次に登場するのは、イワンとドミートリイの婚約者カチェリーナとが繰り広げる恋の修羅場においてである(四五)。婚約者ドミートリイへの愛の一方、その弟イワンへの新たな愛によって心を引き裂かれたカチェリーナ。彼女の愛を独占することを願うイワンは、ホフラコワ夫人宅での出会いの場で、苦しみの極、自らの意に反して「永遠の別れ」を宣言し、その場を去ってしまう。第四篇の題名が示す通り(「客間における^{ナドルイフ}激情の噴出」)、ここにあるのは正にイワンの、そしてカチェリーナの「^{ナドルイフ}激情の噴出」であり、恋する二人の内から噴き出る激情の強さと複雑さは、ホフラコワ夫人の好奇心を満たし、かつ興奮させるに十分のものであった。自らの内で脈打ち始めた「カラマーズフの血」に脅かされるアリューシャもまた、これら二人の「^{ナドルイフ}激情の噴出」を目の当たりにして動揺し、二人の兄とカチェリーナが繰り広げる激しい愛の葛藤について、半ば的確・半ば的外れな判断と勧告を口走ってしまう。つまり彼はカチェリーナのイワンに対する愛に気づくや、直ちに二人にその愛を貫くことを迫るのだ。これに対するカチェリーナの反応は、半ば憤怒・半ば歓喜に捕えられアリューシャを罵倒するという、これもまた容易には説明のし難い「^{ナドルイフ}激情の噴出」となって表出される。「あなたなんて・・・あなたなんて・・・ちっぽけな宗教的痴愚よ。それがあなたよ！」(四五)。

その直後のことだ。突然隣の部屋に去ったカチェリーナは、今度は「喜びに輝いて」戻って来る。二枚の百ルーブリ札を手にした彼女はアリューシャに、婚約者ドミートリイが起こした騒動について説明を始めるのであった。驚くべきことに、イワンの決別宣言で動揺の極にあるはずの、またアリューシャの言葉に激怒したはずのカチェリーナの説明は、「垢すりへちま事件」の概要を見事にバランスよく伝えるものであり、イリュージョンに指を噛み砕かれた直後のアリューシャにとっても、このカチェリーナの説明は少年についての「謎」を一部でも解き明かしてくれるに十分なものであった。これもまたカチェリーナの「^{ナドルイフ}激情の奔出」であり、この時アリューシャは、女性の心の広さと複雑さ、その捉え難い不可思議さについて深く印象付けられたと考えるべきであろう。以下に彼女が明らかにした新たな情報を記しておこう。

カチェリーナが調べたこと

カチェリーナの調べによれば、勤務上の落ち度で職を失った二等大尉のスネギリョフは(それが何時・何処のことであったのかは明らかでない)、家族と共に家畜追込町にかなり以前から住み着いていた。定職を見出せない彼は、町で半端仕事を見つけたり、書記係のような仕事にありついたりすることで、かろうじて生計を立てていたのだが、先に見たように、フォードルの代理人として雇われた際に、運悪くドミートリイの怒りを買ってしまったのである。料亭の「みやこ」でスネギリョフに出会ったドミートリイは、彼の顎髭を掴

んで往来に引きずり出し、公の面前で煮えたぎる怒りを叩きつけたのだ。ところがカチェリーナによれば、なんとその場に学校帰りの息子イリュージンが通りかかったのである。イリュージンは大声で泣きながらドミートリイの周りを駆け回り、彼に必死で赦しを請い、周囲の見物人たちにも助けを求めたのだが、彼らは笑って取り合わなかったのだ。

婚約者のこの恥ずべき行為に心を痛めていたカチェリーナは、アリョーシャに事情を説明した上で、この青年ならば相手の心を傷つけぬ配慮が期待出来ると考え、スネギリョフの許に見舞金を届けてくれるよう依頼したのである(四五)。つい先ほどイリュージン少年に噛み砕かれた指の痛み、兄の恥ずべき行為に対する心の痛み、そして他ならぬスネギリョフとイリュージン少年の心と身体の痛み。これらの痛みの全てを内にアリョーシャは、カチェリーナから手渡された二枚の百ルーブリ札を懐に収め、直ちにスネギリョフの住まいに向かったのである(四六)。

かくして「垢すりへちま事件」はただの小エピソードであるどころか、主人公たちの心と密接に絡み合い、またアリョーシャの心の深くに喰い込む「事件」としての相貌をますます強めてゆくのである。

「垢すりへちま事件」(4) —スネギリョフの説明から—

今までの情報に加えて、アリョーシャが「事件」の更なる詳細とその残酷さと痛ましさを知るのは訪問先において、つまり少年の父スネギリョフの口からである(四七)。それによれば下校時のイリュージンは一人ではなかった。学校の級友たちも一緒だったのだ。イリュージンはこの仲間たちと一緒に、父親がドミートリイによって料亭から広場に引きずり出され、顎髭を掴んで引き回される姿を目のあたりにしてしまったのだ。少年は直ちに父親に飛びつき、「パパ、パパ」と叫びながら、父親をドミートリイから引き離そうとする。

「放して、放して下さい。これは僕のパパです。パパなんです。赦してやって下さい」(四七)

スネギリョフによれば、少年は必死で懇願をしながらミートリイにしがみつき、夢中でその手に接吻をしたのだという。更に父親によれば、ドミートリイがスネギリョフの顎髭を掴んで引き回したことから、級友たちは学校で彼の顎髭のことを「垢すりへちま」と呼び、息子のイリュージンをからかい始めたのだという。「垢すりへちま」という奇妙な名の由来、この「事件」の悲惨さと残酷さが、ここに具体的にアリョーシャの前に明らかにされたのである。

説明が終わるや、アリョーシャは叫び声を挙げる。

「誓います。兄は誠心誠意、心の底からあなたに悔恨の情を表わすことでしょう。

例のその広場に跪いてでも・・・僕が必ずそうさせます。さもなければ、もう兄

弟でも何でもありません！」(四七)

スネギリョフの反応は冷ややかであった。アリョーシャの言葉は、その心の熱さと高潔さを証明こそすれ、彼がこの件で未だ兄のドミートリイと正面から話さえていないことを曝け出してしまったのだ。だが恐らくアリョーシャの誠意を感じたからであろう。スネギリョフは自らの住む「穴倉」、つまり彼の家族四人について語り始める。この胸を打つ物語については、残念だがここで扱う余裕はない。

自らの家族について語り終えた後、スネギリョフは更に「垢すりへちま事件」について、グルーシェニカと彼との間で交わされた会話も明らかにする。自分に加えられた侮辱のことで、スネギリョフがドミートリイを裁判に訴えることを考えていた時のことだ。グルーシェニカが彼を呼び出し、脅しをかけたのである。——もしあなたが訴えるというのなら、ドミートリイがあなたを殴ったのは、あなたの「詐欺」が原因であったと世間に暴露してやるだろう。あなたを永久に追放し、今後自分の許では一切稼がせてやらないだろう。また自分のパトロンであり有力な商人のサムソーノフにも言いつけてやり、この商人からもあなたは追放されることになるであろう。

更にスネギリョフの説明によれば、ある理由のためフォードルも既に彼を信用しなくなり、彼の領収書も押さえ、裁判所に提出しようとしているのだという。グルーシェニカとサムソーノフとフォードル。家畜追込町の金融を仕切る人間たちに睨まれ、スネギリョフが生計を立てるべき途は今や完全に閉ざされてしまったのである。

ポーランド人将校に恋をし、捨てられてからの五年間。将校への復讐心となお断ち切れぬ愛との間で苦しみ続け、世に対してはサムソーノフやフォードルと組んで「ユダヤ女」となり遂げたグルーシェニカ(七三)。ここに囚らずも彼女の「地下室」の一端が明らかとなる。だが我々は話を拡散させず、アリョーシャとスネギリョフの対話に集中しよう。

「^{イースチナ}真理」

アリョーシャが信用出来る青年であることを見て取ってのことであろう。スネギリョフは自らの内に沸騰する思いをぶちまけ始める。それはこの事件の残酷さについて、正確には息子の心が直面させられた「真理」の残酷さについてであった。——この事件によってイリュエシンの内には「高潔な魂」が目覚めたこと。息子は「父親のため」「真理のため」「正義のため」一人で立ち上がったのであること。だが少年にとって、それは余りにも残酷な「真理」への目覚めであったこと……

「うちのイリュエシヤは、正にあの瞬間、あの広場で、あなたのお兄様の手に接吻をした正にその瞬間、真理の一切を悟ったのです。そしてこの真理があの子の内に入り込み、あの子を永遠に打ちのめしてしまったのです」(四七)

「神と不死」という究極の「真理」を求める「ロシアの小僧っ子」たち、つまりアリョーシャやイワンやドミートリイたちを向こうに置いて、イリュージョン少年が直面させられたのはもう一つの残酷な「真理」であった。それは運命がこの少年を放り込んだ過酷な現実のことであり、その「真理」は情け容赦なく少年の内に押し入り、その心も身体も完膚なきまでに打ちのめしてしまったのだ。イリュージョンばかりではない、その父親のスネギリョフにとっても、「真理」とは運命が投げつける理不尽さと醜悪さに他ならず、アリョーシャたちが求める究極の「真理」とは対極にあって、彼らの生そのものを「行き場のない」「穴倉」に放り込み、その心も身体も引き裂き苦しめる源そのものなのだ。「真理」を巡るこの皮肉と矛盾。『カラマーゾフの兄弟』が抱える最大のテーマの一つが、「垢すりへちま事件」から浮き彫りにされてくる。

イリュージョンとスメルジャコフ、これら「罪なくして涙する幼な子」たちが結託して踏み込んだ悪魔的事件、「ジューチカ事件」については改めて後に見よう（本章^[5]）。

父と子の散歩

社会から閉め出された父。級友たちから「ぼろの垢すりへちま」の息子として嘲笑される息子。スネギリョフによれば、悲しみを抱えた父と子は、毎日夕方になると手を取り合って散歩に出かけ、町外れの放牧場が始まるころ、生垣の傍らにある大きな石のところまで歩いて行くのだった。人目を避けたこの散歩道で、二人は悲しみを打ち明け合い、心ゆくまで涙を流したのである。ある時息子は父にドミートリイと決闘をするようせがむ。しかし人を殺すことは許されないと諭されると、息子は大人になって自分がドミートリイを投げ倒すことを宣言する。また彼は級友たちとの争いについて告げ、金持ちになって家族全員で他所の町に引っ越しをする夢を語るのであった。イリュージョンの胸の内は、次の言葉一つに凝縮されるであろう。

「パパ。パパ、大切なパパ。あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」（四七）

スネギリョフから父と子の悲しみと怒りをぶつけられ、アリョーシャの心は「涙で震えていた」。この作品の終局、アリョーシャの魂にこのイリュージョンの言葉が甦る場面は、本章の最後で取り上げ（^[6]）、改めて検討しなければならない。

「この時」とスネギリョフは語る、「我々の姿を見ていた者は誰もいません、神様お一人が見ておいでだったのです」「恐らく神様は、この私を[天の]名簿に書き入れて下さることでしょう」。筆者は彼がこうも付け加えたと記す。「お兄様[ドミートリイ]にお礼を申し上げて下さいまし」。この時のスネギリョフの奇妙な語り口について、筆者は「敵意に満ちた、そして神懸かり的な言葉遣い」であったと記す。この「神懸かり的な言葉遣い」と彼の「神様」については、最終回に考えることにしよう。

「妹」からの二百ルーブリ

「パパ。パパ、大切なパパ。あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」。先に記したように、アリューシャの心は「涙で震えていた」。だがスネギリョフの多弁さは、自分への信頼の証でもあろう。こう自らを勇気づけたアリューシャは「叫び声」を上げるかのように語ったと記される。—— 自分はあるあなたのお子さんと「仲直り」がしたい。また自分には「預かり物」がある。それは「妹から兄への援助の手」として差し出されたものだ。「この世界には、兄弟も存在するのです」。アリューシャがこの言葉と共に二百ルーブリを取り出したのは、生垣の脇にある大きな石の傍らであった。

「妹から兄への援助の手」、二百ルーブリの運命についても確認しておこう。差し出された見舞金、夢にも思わなかったこの大金に仰天したスネギリョフは、それを受け取ることが自らの「卑劣さ」を証するのではないか、アリューシャの軽蔑を呼ぶのではないかと尻込みをする。同時に彼は語り出すのだった。この金で妻と娘[ニーノチカ]が苦しむ病気の治療が可能となるだろう。家族のために馬車馬のように働くもう一人の娘[ソーネチカ]も大学に復学出来るだろう。息子と夢見た引っ越しも実現し、自分も他所の町で書記の仕事が見つかるだろう。—— このスネギリョフに向かい、アリューシャも申し出るのだった。「弟」として「友」として、自分もこの夢の実現のために自らの金を提供する用意がある。

この直後に訪れたのは、暫し浸った有頂天の夢想に対する激しい反動であった。「崖から飛び降りる決心をした人間」のような相貌をしたスネギリョフは、異様で奇怪な目つきでアリューシャを見つめ、口元には微笑のようなものを浮かべ、早口で囁くのだった。「一つ手品をお目にかけて進めましょう」。二枚の紙幣をアリューシャの目の前に突き出した彼は、突然それらを揉みくちやにし、砂の上に力一杯に叩きつけ、「猛烈な憎悪を以って」靴の踵で踏みじり始める。彼は足を踏み下ろすごとに息を喘がせ、繰り返し叫ぶのだった。「ほら、あなたのお金です！ ほら、あなたのお金です！ ほら、あなたのお金です！ ほら、あなたのお金ですよ！」。突然後ろに飛びすさり、アリューシャの前に身を立たたせたスネギリョフの全身は、言い表し難い誇らしさを発していたと記される。「もし我が家の恥と引き換えに、あなたからお金を受け取ったりしたら、私はうちの子に一体何て言ったらいいのです？」

立ち去るスネギリョフを、言い表し難い悲しみと共に見送っていたアリューシャは、相手の姿が見えなくなるや、砂地にめり込んでいた二枚の紙幣を拾い上げ、それらの皺を伸ばし始める。紙幣が再び真新しい札のようにパリッと音を立てるまでになると、彼はそれらをポケットに収め、カチェリーナへの報告のため、ホフラコワ夫人宅に向かって歩き始めるのだった。彼はプライドを守ったスネギリョフが、次には二百ルーブリを受け取ることを確認していたのだ。アリューシャの人間に対する底なしの信と愛、そして人間心理に関する驚くべきリアリスティックな洞察力。これらをより理解するために、我々は彼がホフラコワ夫人の邸宅に戻り、その娘であり彼の婚約者であるリーザと交わす会話に暫らく耳を傾けよう。

4.「平等」であること —アリョーシャとリーザが担う使命—

「垢すりへちま事件」(5) —アリョーシャの報告から—

アリョーシャがスネギリョフの住まいを訪問していた間のことである。リーザは母親のホフラコワから、スネギリョフがドミートリイに侮辱された事件について聞かされ、涙まで流していた。戻ってきたアリョーシャから報告を聞いた彼女は、アリョーシャがスネギリョフをそのまま帰してしまったことを残念がる。だがリーザに対するアリョーシャの答えはこうであった。—— スネギリョフを追いかけない方がよかったのだ、明日になれば彼は金を受け取ってくれるだろうから。そもそもスネギリョフは大金を目の前にするや、余りにもストレートに喜びを表現し過ぎてしまったのだ。しかし彼のように真に正直で善良な人間は、自分が金を踏みじめるなどということは最後まで自覚していないものの、その予感を持っているものだ。だからこそ差し出された金を前にして、あんなにまで有頂天になることが出来たのだ。だがこのことで彼は自らを恥じ、自らに立腹し、更にまた余りにも早く相手に心を赦してしまったことで自らを赦せなかったのだ。しかしひとたび金を踏みじった以上、彼の自尊心と誇り高さは既に立派に証明されたのであり、後は必ずや必要不可欠なあの金を受け取ることになるだろう。大切なことは、スネギリョフが我々から金を受け取るとしても、その際彼が我々の誰とも「平等である」と確信していてくれることだ。

リーザの疑問、「高目線」

アリョーシャの答えが示すものとは、人間心理に関する驚くべき洞察力の鋭さと的確さであり、また人間に対する底なしの善意、信と愛と言えよう。リーザもこのことに驚嘆する。だが彼女の心には、なおどこか腑に落ちないものが残っていた。お金を巡るスネギリョフの心理について、アリョーシャが示した詳細な分析には、どこか「高みから」なされる「軽蔑」のようなものが含まれているのではないか。彼女はこの疑問を払拭し切れなかったのである。

「そこにはあの人への、あの不幸な人への軽蔑がないかしら・・・私たちが今あの人を心のあのように、何か高みから見のように分析したことの中には？つまりあの人をきつとお金を受け取ると、今あのように結論したことの中には。どうかしら？」(五1)

アリョーシャは、実は自分も同じことを考えていたのだと打ち明ける。だがこの問題について、「帰り道で」既に彼の自己検証は終わっていたのである。彼によれば、ここに「軽蔑」など一切存在しないのだ。改めて彼が強調するのは、スネギリョフも自分たちと

「平等である」こと、彼もまた我々と「同じである」ということだ。

「僕たち自身があの人と同じであるのに、誰もがあの人と同じであるのに、どうして軽蔑するなどということがあるのですか？ だって僕たちは本当に同じであって、より優れているなどということはないのですから」（五1）

「平等である」こと、そして「同じである」こと

スネギリヨフを「真に正直で善良な人」とし、また彼を含めた人間全てが「同じ」であり「平等」であることを正面から説くアリョーシャ。ここにはこの青年を理解する上で、またこの作品を理解する上でも、極めて重要な基本的視点が存在すると考えるべきであろう。彼が説くこととは一見すると、正義感に溢れた「現代青年」ならば誰もが持つ「人間平等論」とも言えるであろう。だが思い起こすべきは、筆者が既に第一篇において、アリョーシャとは「根本的ないわば自然発生的な信」の人であり、決して他人を批判することも裁くこともせず、一切を赦す稀有な天性に恵まれた人物であると強調することだ（一4、5）。つまりアリョーシャの人間に対する姿勢とは、単に近代的「人間平等論」に由来するというよりも、先に見たように更に遙か遠く新約的磁場にまで遡る奥行を持ち、彼がその呼び声に応えたイエス・キリストに根を置く姿勢であり、殊にその「隣人愛」（ルカ十27）や「相互愛」（ヨハネ十五12・13）を土台とすると考えるのが自然であろう。

更に注意すべきは、この青年がイエス・キリストの呼び声に応じて出家し、その下で修行するのがゾシマ長老であるという事実だ。修道院で禁欲と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守るこの長老は、「主人と召使い」という身分の差別を強く斥ける人物であったことは、「場違いな会合」のゾシマからも（二3・4）、またアリョーシャが編纂する「ゾシマ伝」からも明らかである（六3A・C・F）。そしてゾシマの根にあるものとは、次のようなイエスの言葉と生の姿勢であったと考えるべきであろう。

「^{かへ}反つて^{おほい}大ならんと思ふ^{おも}者は、^{もの}汝らの^{なんぢ}役者となり、^{えきしや}頭たらんと思ふ^か者は、^{おほ}凡ての^{もの}者の^{しもべ}僕となるべし。^{ひと}人の^こ子の^{きた}來れるも、^{つか}事へらるる^{ため}爲に^{かへ}あらず、^{つか}反つて^{おも}事ふる^{もの}ことをなし、^{また}又^{ひと}おほくの^{あがなひ}人の^{おの}賠償として^{いのち}己が^{あた}生命を^{ため}与へん爲なり」

（マルコ十43-45他）

人間全てが「同じ」であり「平等」であること、「主人と召使い」あるいは「旦那と下男」などの違いを超えて、人間は「兄弟」であり「友」であること。否むしろ、自らを「事ふる」人として生きること。アリョーシャの信念と生の姿勢はこのイエスに根を置くものと考えられるべきであろう。

イエス・キリストとゾシマ長老に加えて、我々がもう一人忘れてはならないのはゾシマの兄マルケルである。先に見たようにマルケルが死の間際に豁然として与えられたのは、

己の根源的罪性についての認識と、そこから来る万人万物一切との一体感、そして愛であった。聖像の前にお燈明を灯そうとした老いた乳母に対して、マルケルが語りかけた言葉を確認しておこう。これもまたアリョーシャがゾシマ長老から語り聞かされ、その後「ゾシマ伝」に収録したものである。

「灯しておくれ、婆や。灯しておくれ。以前には禁じたりして、僕は冷血漢だった。婆やは燈明を灯しながら、神にお祈りをする。僕の方は婆やを喜びながら、お祈りをする。ということは、同じ神に僕らはお祈りをしているということではないか」(六2A)

「お母さん、僕の喜びよ、主人と召使いが存在しないわけにはいかないでしょう。でもこの僕が僕の召使いたちの召使いになっても構わないでしょう。あの人たちが僕の召使いであるのとまったく同じようにね」(同上)

死を前にしてマルケルの心に臨んだ己の根源的罪性の感覚、万人万物一切に対する罪の自覚とは、その裏返しに万人万物一切が「同じ神」の下に存在する、そして「同じ神の前にお祈りをする」との絶対的被造物感情であり、そこから来る絶対的一体感と平等感であった。「同じ神」への祈りから与えられる万人万物一切の一体感と平等感、そして万人万物一切への愛。これはマルケルからその弟ゾシマに伝えられ、やがて若きゾシマの回心体験を呼び起こすばかりか、長老となったゾシマの説教の主テーマとなり、更にはその弟子アリョーシャの生の基本的姿勢となり、彼が編纂する「ゾシマ伝」の基調音、つまりは『カラマーゾフの兄弟』の根底を貫く基本的骨格となってゆくのである。

「殉教者」の心

続いてアリョーシャは、自分の魂がちっぽけなものでしかないこと、それに比べスネギリョフの魂はちっぽけどころか、逆に非常に繊細であることを告げ、加えてリーザに次のようなゾシマ長老の言葉を告げるのであった。

「ね、リーザ、かつて僕の長老がこうおっしゃいましたよ。《子供の世話するように、絶え間なく人間の世話をしてあげる必要がある。またある人たちについては、病院にいる病人のように、世話をしてあげるのだ》」(五1)

先に挙げたイエスの言葉(マルコ二17)を向こうに置いて、ゾシマが語った言葉であろう。リーザは心を揺り動かされ、二人は共に将来「病人の世話」をし「人間の面倒」を看ることを誓い合う。この後に描かれる婚約者たちのひと時の幸福については省略しよう。

最後にリーザから、二人の再会以来「言い知れぬ不安と悲しみ」の中にあるようだと言

摘され、アリョーシャが彼女に語った言葉も確認しておかなければならない。

「兄たちは自分を滅ぼそうとしています」

「父もそうです。そして他の人たちをも一緒に滅ぼしてしまうことでしょう。ここにはいつかパイーシィ神父がおっしゃった《地上的なカラマーゾフの力》が働いているのです。地上的で、凶暴で、むきだしの力が……この力の上にも神の霊が働いているのか、それさえ僕には分かりません。分かっているのは僕自身もカラマーゾフだということだけです……僕は修道僧です。修道僧ですよ？ 僕は修道僧でしょう、リーザ？ あなたはたった今僕のことを修道僧だと言いましたよね？」

「でも僕は、もしかしたら神を信じていないかもしれません」

「それに今、他のことはさておき、僕の友〔ゾシマ長老〕がこの世を去ろうとしているのです。世界で一番の人がこの世を去ろうとしているのです。ああ、リーザ、あなたが分かってくれば、分かってくればいいのですが。どれほど僕がその人と繋ぎ合わされ、固く結ばれているかということ！ 僕は一人で取り残されてしまうのです……僕はあなたのところに来ます、リーザ……これからはずっと一緒にいましょう……」(五1)

万人万物一切の上に「神の霊」の働きを見ずにはいないアリョーシャ。その彼に差し迫る家族の悲劇と、自分自身の内でも激しく胎動を始めた「地上的なカラマーゾフの力」、神への信の揺らぎ、そして近づくゾシマ長老の死——この時アリョーシャが直面する、そして間もなく直面させられるであろう問題のほぼ全てを、彼はリーザに正直に告白したのである。後に彼と悪魔の問題を考える際に (5)、我々は改めてここに戻らねばならない。

最後にもう一点だけ注目しておこう。先に見た「高目線」ということでリーザが投げかけた問い、これをアリョーシャが改めて取り上げることだ。アリョーシャはこれが「殉教者」的な問いであるとし、このような問いが浮かぶ人とは自身が苦しむことの出来る人であり、リーザ自身が肘掛椅子に座って既に多くのことを考えてきた証拠であると評するのである。不幸な人とその苦しみに心を寄せ、自らが苦しむことの出来る人リーザ。アリョーシャは彼女を「殉教者」として捉えたのだ。アリョーシャのこの視線はリーザその人を考える上でも、また書かれずに終わった『カラマーゾフの兄弟』の後篇における二人の将来の運命を考える上でも、忘れてはならない視点であろう。この「殉教者」リーザについて、筆者が記す一つの重大なエピソードについては、最終回の第6章で取り上げることにしよう。そこでは「罪なくして涙する幼な子」というこの作品の通奏低音が、ただの悲劇的音色としてばかりではなく、突如リーザを介して悪魔的音調を以って鳴り響くことになるであろう。

5. 「ジューチカ事件」 —イリュージョンとスメルジャコフ—

公判を間近にして

「垢すりへちま事件」について筆者が記す様々な情報と、様々な登場人物たちがもたらす証言を（1）から（5）まで順次検討してきた。作者ドストエフスキイがこの事件に関する情報を周到に各所に配置し、それらの開示と重ねてアリョーシャの認識と自覚の深化がクレッシェンド的に進むという構成も明らかとなった。

だが、まだ終わりではない。この「垢すりへちま事件」について、アリョーシャに最後の情報をもたらす人物はコーリヤ少年である。「垢すりへちま事件」から既に三か月近くが経ち、父親殺しの罪で誤認逮捕されたドミートリイの公判を間近に控えた十一月初旬、そしてイリュージョンの死の直前、アリョーシャはコーリヤと初めて出会い、彼からイリュージョンに関する悲劇の全体像を初めて知らされるのだ。そこでは「垢すりへちま事件」に加えて、「ジューチカ事件」がイリュージョンの心を如何に苦しめていたかが明らかとなるであろう。また我々はこの少年の悲劇がスメルジャコフのそれと共に、この作品の最初のヤマ場である「場違いな会合」から最後のピークたる「エピローグ」に至るまで、地上に満ちる「罪なくして涙する幼な子」を指し示す通奏低音として止むことなく響き続けていることに改めて気づかされるであろう。「垢すりへちま事件」に関するコーリヤの報告については、このすぐ後に「垢すりへちま事件」（6）として扱おう。

さて繰り返し確認してきたことだが、ゾシマ長老の遺訓に従い、その死後三日して修道院を出たアリョーシャは、それぞれの父親殺しの罪と向き合うイワンとドミートリイを訪問し、彼らの心に寄り添い、彼らを「真実の光の中に」起ち上がらせるべく努めている。彼らと深く関わるカチェリーナやグルーシェニカ、そして自らの婚約者リーザをも彼は絶え間なく訪れ、その悩みに耳を傾け続けてやっている。またアリョーシャは、二か月前にカチェリーナの依頼でスネギリョフの住まいを訪れて以来（第四篇）、その後も「死の床」にあるイリュージョンを絶えず訪問し、その家族全員とも交流を深めている（第十篇）。仔犬のペレズフォンを連れたコーリヤが登場し、アリョーシャと初めての会話を交わすのは、その交流も最終段階に至ってのことである。

アリョーシャの様々な人々との交流。その延長線上にはスメルジャコフの婚約者マリアがいて、更には彼がスメルジャコフとも何らかの形で関わっていた可能性も考慮されるべきであろう。これら二人との交流について筆者が直接明示することはまずないからという理由で、アリョーシャが彼らを忘れ去ったと考えたり、あるいはスメルジャコフを正面から扱い切れない筆者の限界性を云々したりするのは軽率であろう。この作品の通奏低音としての「罪なくして涙する幼な子」、イリュージョンとスメルジャコフ。筆者が彼らの内でも殊にイリュージョンとアリョーシャとの交流を主として取り上げ、スメルジャコフについては最低限の情報しか提供しないという事実。ここには作者ドストエフスキイ自身の深い構成の意図が存在すると考えられる。この点については今回イリュージョンとアリョーシャと

の交流を最後まで検討し、次回のドミートリィについての検討をするという準備を経た上で、最終回に正面から取り上げることにしよう。

コーリヤとの出会い

コーリヤとアリューシャとの出会いは、スネギリョフの住まいの前において行われる(十4)。仔犬のペレズヴォンを連れてイリュージョンの許を訪れたコーリヤは、この少年との二か月ぶりの再会の前に、是が非でもアリューシャと会い、彼と知り合いになっておきたかったのだ。アリューシャはこの二か月の間に、敵対していたイリュージョンと級友たちとを和解させ、毎日彼らと共に「死の床」にあるイリュージョンを見舞っていた。ところが何故かコーリヤだけはそこに加わりたがらず、「特別な目的」のため一人この日を待っていたのである。少年コーリヤのユニークさについて、恐らくは後篇への布石であろう、筆者は三つもの章を用いて活写している(十1-3)。陰鬱な色調を基本とするこの作品の中に、清冽で微笑ましい風が吹き込む三章である。だがここでそれを取り上げる余裕はない。

二十歳の青年と十四歳の少年。二人は出会った瞬間、互いが深く結ばれ心を通い合わせ得る「友」であり、また「師」と「弟子」であることを直観する。だがコーリヤと出会うやアリューシャがしたこととは、コーリヤが連れて来た仔犬があのジューチカではないのかと尋ねることであった。それというのも前々回の第2章(11-2)で見た「ジューチカ事件」、スメルジャコフがイリュージョン少年を唆し、仔犬のジューチカにピン入りのパンを呑み込ませたあの事件こそ、「垢すりへちま事件」と共に死にゆくイリュージョンの心を苛み続ける痛恨事だったのだ。アリューシャによればスネギリョフと少年たちは町中を探したが無駄であった。またイリュージョンはアリューシャの目の前で、「三度まで」涙ながらに語ったのであった。

「パパ、僕が病気になったのはね、僕があの時ジューチカを殺したからなんだよ、神様が罰を下したからなんだよ」(十4)。

アリューシャは仔犬を連れてきたコーリヤを見て、長いこと姿を見せなかったこの少年がとうとうジューチカを探し出してくれたのかと思ったのだ。だがそれはジューチカではなく、コーリヤのペレズヴォンであった。筆者はコーリヤがこの時「謎めいた微笑を浮かべた」と記す。続いてコーリヤは、まずは「事情の一切」を説明させてほしい、自分はそのために来たのだからと語る。イリュージョンに指を噛み砕かれてから二か月が経って初めて、あの投石合戦や「垢すりへちま事件」を含んで、この少年を巡る「謎」の全体像がアリューシャに明らかとなる時が来たのである。

二人の少年の出会い、「感傷的^{センチメンタリズム}態度」

コーリヤの説明は彼自身とイリュージョン少年との出会いから始まる。この春予備クラス

に入ってきたイリュージョンは、その「気位の高さ」によってコーリヤの目を引いたのだという。イリュージョンも二歳年上のコーリヤを心から慕うようになり、常にその後を従い歩くようになる。ところがやがてイリュージョンの内から湧き出てきたのは、コーリヤへの「奴隷のような心服」と同時に、それとは逆の「反抗的な態度」であった。コーリヤの言葉で言えば、イリュージョンの内には「感傷的態度」が、つまり愛情の独占欲が生まれ出たのだ。恐らくコーリヤこそ、イリュージョンが出会った初めての先輩であり友であり、全てをぶつけることの出来る存在だったのであろう。このような「感傷的態度」は「鍛え直して」やらねばならない。コーリヤはイリュージョンに対して、意図的に冷淡な態度を取り始める。

「ジューチカ事件」

ところが間もなくコーリヤは、イリュージョン少年が日に日に思い悩み、悲しみに打ち沈んだ様子を増し加えてゆくことに気づく。この深い悲しみの中には「感傷的態度」とは違う何かが、つまり愛情の駆け引きの問題などを遥かに超えた「悲劇」の匂いが感じ取られた。コーリヤから問い詰められ、イリュージョンが明かしたのは「ジューチカ事件」のことであった。この少年はスメルジャコフに唆され、番犬ジューチカにピンを忍び込ませたパンを食べさせてしまったのである。ジューチカは悲鳴を上げて走り去る。自らが仕出かしたこの「愚劣で」「卑劣な悪戯」に、イリュージョンは魂を根底から震撼させられてしまったのだ。仔犬を殺してしまったとの「良心の呵責」に沈むイリュージョンを前にして、コーリヤはこの少年の「卑劣さ」を改めて「鍛え直すべく」、わざと以前よりも冷淡な態度をとり、「絶交」さえ宣言するのだった。たがこの絶交宣言はコーリヤの「芝居心」から出たものであり、彼はわずか四～五日間だけイリュージョン少年を懲らしめ、少年が後悔したことを見届けてから手を差し延べようと目論んでいたのである。だがコーリヤの「芝居心」は大きく目算が狂う。彼の絶交宣言に対して、イリュージョンもまた一つの宣言を以って応えたのだ。—— 自分はジューチカに対してばかりか、全ての犬にピン入りのパンをまいてやる。

「垢すりへちま事件」(6)、そして「投石合戦」

コーリヤから向けられる冷淡な視線と態度。そこに突然起こったのが、あの「垢すりへちま事件」であった。その場に居合わせた級友たちは、翌日学校に行くと「垢すりへちま、垢すりへちま」と囃し立てる。コーリヤの絶交宣言に続く級友たちの嘲笑。全くの孤立無援の中で、級友たちとの間に新たに喧嘩が始まる。その場に行き合わせたコーリヤと目が合うや、突然イリュージョンはペン・ナイフで彼の右足の腿を突き刺してしまう。この事件の直後に起こったのが、下校途上のあの投石合戦であり、アリューシャはここに行き合わせたのである。コーリヤは「ペン・ナイフ事件」のことを、先生にも母親にも告げることはしなかった。翌日からイリュージョンは病の床に伏し、最早学校に出て来ることはなかった。だがコーリヤはこの少年を「赦して」やりに、つまり「仲直り」をしに行くことはしなかった。彼には「特別な目的」があったからである。

この「ジューチカ事件」については、アリョーシャがスネギリヨフ家を訪問するようになってから、またフォードル殺害事件やスメルジャコフとの関わりからも、「垢すりへちま事件」と共に、既に早い時点でアリョーシャの耳に入っていたと考えられる。事実今まで見てきたように、アリョーシャにとっても、またコーリヤを除いてイリュージョンを毎日のように見舞うようになった少年たちにとっても、この事件と仔犬の安否は「垢すりへちま事件」と共に、死を間近にしたイリュージョン少年を巡る最大の心痛事となっていたのである(十3・4・5)。だがアリョーシャはコーリヤの説明によって初めて、「ジューチカ事件」に先立つイリュージョン少年のコーリヤとの心理的葛藤や、その後の「垢すりへちま事件」や「ペン・ナイフ事件」や「投石合戦」などについて、時系列的な順序を含め、少年の悲劇と苦悩の全体像を詳細かつ正確に知るに至ったのだ。

さて我々はおもすると「垢すりへちま事件」と「ジューチカ事件」の前後関係を曖昧にし、イリュージョン少年の心の動きを理解し損なってしまう危険があるのではなからうか。そうでなくとも次から次へと様々な事件と問題が勃発し、多くの変数を加えて複雑さを加速度的に増してゆくのが『カラマーゾフの兄弟』である。今まで見てきたように、「垢すりへちま事件」についての情報も一度には与えられず、「ジューチカ事件」との関係も、そしてイリュージョン少年が苦しむ罪意識も、作品の終わり近く、第十篇に至って初めて明らかにされるという具合である。これら全てがアリョーシャの認識の深まりと呼応させるべく、作者の卓越した構成力の下に配置されているとはいえ、迷宮のようなこの作品の中で、我々読者がイリュージョンの心の動きを正確かつ詳細に捉えることは容易なことではない。改めて我々はここでイリュージョン少年が、コーリヤとの愛憎の葛藤の只中で「ジューチカ事件」を起こしたのであること、そしてその罪意識に苦しむ少年に追い打ちをかけるように「垢すりへちま事件」が生じたこと、つまり決して「垢すりへちま事件」への復讐心から少年が「ジューチカ事件」を起こしたのではないことを確認しておこう。ここから浮かび上がるのはイリュージョン少年の悲劇性と悪魔性であり、アリョーシャが「実行的な愛」の眼を以って、そしてコーリヤが「特別な目的」を持って見据えていたのは、イリュージョン少年がこの悲劇性と悪魔性と共に陥った地獄だったのである。

我々が第一回目から追っているスメルジャコフのドラマとの係わりで、今回明らかとなった時系列的関係も確認しておこう。「場違いな会合」においてフォードルが語るところによれば、「垢すりへちま事件」は「場違いな会合」の三週間前のことであった。そしてこれはコーリヤの報告から判断すると、恐らくは「ジューチカ事件」から一週間も経たぬ内に起きた事件と考えられる。またフォードルをスメルジャコフが殺害するのは「場違いな会合」の二日後、ゾシマ長老の死の翌日のことだ。かくしてスメルジャコフがイリュージョン少年を唆して「ジューチカ事件」を起こしたのは、長老の死と父親殺害の一か月ほど前ということになる。二人の死に向かいカラマーゾフの兄弟たちを中心に演じられる様々なドラマと並行して、「罪なくして涙する幼な子」たる二人の運命への復讐劇もまた、着々と進行していたことが明らかとなる。家畜追込町を舞台にドストエフスキイが刻んでいたのは、

これら何重にも重なる終末論的ドラマだったのである。

このような展望の下に見ると、登場人物たちのそれぞれの罪との対決が描かれるこの作品において、誰よりも早く自らの内なる罪性と直面させられ、罪意識の地獄に追いやられていたのはイリュージン少年であったという事実が浮かび上がってくる。かくして『カマーズフの兄弟』前編最後のテーマとは、「ジューチカ事件」によって罪意識の地獄に追い込まれたイリュージンと、フォードル殺害によって死相まで現れるほどの「悪業への懲罰」の現前に曝されたスメルジャコフと直面し、アリョーシャがこれら二人を如何に闇から光の内に導き入れ得るか、如何なる形で「一本の葱」を与え得るかの問題であることが明らかとなる。更にこれを言い換えれば、我々が直面させられるのは、「罪なくして涙する幼な子」たちの心にさえ忍び込む悪魔の問題、人間の根源的罪性の問題に目を向け、その救済の可能性について思索するドストエフスキイであるとも言えよう。

コーリヤの「特別な目的」

さてコーリヤがアリョーシャに語った「特別な目的」。それは以下のようなものであった。ジューチカはピンを呑み込んでしまわず、ある家の裏庭に潜んでいたのだ。この仔犬を探し出したコーリヤは、ジューチカという名を「ペレズヴォン(鳴り響き、轟き渡り)」と名付け直し、この仔犬を密かに一人で鍛え上げ、服従と様々な芸を教え込んだ上で、ある日突然イリュージンの許に連れてゆき、ジューチカを殺してしまったと思い込んで罪意識に苦しむこの少年を、一気に絶望の底から救い上げてやろうとしたのである。この計画の最後の仕上げはイリュージンの家族と級友たちの前で、それもとりわけアリョーシャの目の前でなされなければならなかった。ペレズヴォンを連れてきたコーリヤが、スネギリョフ家に入る前にアリョーシャを呼び出したのは、このためであった。つまりこの少年は、誰よりもまずアリョーシャに自分の「偉業」^{いさおし}を認めて貰おう、そのことで晴れ舞台の輝かしい第一幕を存分に味わおうとしたのである。だが少年はこれでも満足しなかった。彼はこの晴れの日を更に盛り上げよう、自らの偉業を更に「鳴り響き」渡らせようと、火薬と実弾付きの小型の大砲までも用意していたのである。

コーリヤの「悪戯心」^{いたづらごころ}

効果は絶大であった。だがこの輝かしい晴れ舞台には、実際には致命的な落とし穴が潜んでいたのである。筆者によれば、様々な苦悩に加え、病で身体の衰弱し切ったイリュージンにとり、思いもかけなかったジューチカの出現は、コーリヤが狙ったような劇的な効果をもたらすどころか、それを遙かに超えて「苦痛に満ちた」「致命的な影響」をもたらす結果となってしまったのだ。というのも確かに「ペレズヴォン」という新たな名を持つ「ジューチカ」の登場は仔犬の「復活」に違いはなく、イリュージン少年に測り知れぬ歓喜と感動をもたらすものであった。だが少年が目にしたのは、自分が殺したと思い込んでいた「ジューチカ」ではなく、「死んだふり」を始めとする様々な芸当を仕込まれたコーリヤの

「ペレズヴォン」でしかなかったのだ。ジューチカにピン入りのパンを呑み込ませ、死に追いやってしまったと思込んだイリュージョンの絶望と悲しみ、その罪意識はコーリヤの小細工で消え去るには、既に余りにも深く余りにも激しく少年の心を侵蝕してしまっていたのである。

筆者はアリョーシャが、「不満げな非難」を込めて「叫んだ」と記す。

「それでは、君は本当に、犬に芸を仕込むだけのために今までずっと来なかったのですか！」(十4)

人を批判したり裁いたりすることがないアリョーシャ。その彼が発した極めて珍しい叱責の言葉である。二か月をかけてコーリヤが成し遂げた仔犬の「復活」は、呑み込んだピンの痛みに悲鳴を上げて逃げ去った「ジューチカ」から、様々な芸を仕込まれた「ペレズヴォン」へ、つまりはコーリヤの奴隷犬への「変身」でしかなく、それは少年自らが呼ぶように「手品」、あるいは「芝居」でしかなかったのだ。そこにイリュージョンに対する底なしの好意と善意があったことは事実であろう。だが実際に現われ出したものとは、コーリヤ自身の「悪戯心いたづらごころ」によって作り出された「復活劇ごっこ」でしかなく、イリュージョンの罪意識の問題は何ら解決されはしなかったのである。

アリョーシャが見つめるもの、自愛心と悪魔

コーリヤの「悪戯心」から次々と弾むように湧き出てくる「手品」や「芝居」。これはアリョーシャも直ちに見抜き深く共感したように、この少年の「素晴らしい天性」に由来する生命力の爆発であり、「若い心に芽生える芸術的欲求」を証するものに他ならない。だがそれはコーリヤ自身も言うように、未だ「自愛心から、エゴイスティックな自愛心と全くの我儘さから」生まれ出た「手品」でしかなく、未熟で「感傷的な」「芝居」以上のものとはなり得ず、「滑稽さ」を免れないものなのだ。自分の未熟さと滑稽さを自覚し、自らを「卑劣漢」とまで言って責めるコーリヤに対し、アリョーシャは言い聞かせる。現代では「悪魔が自愛心の姿を取って、あらゆる世代に入り込んでいるのです」。ここで「悪魔」という激しい言葉を用いたアリョーシャに注意すべきであろう。以下に見るように、アリョーシャにとって「悪魔」は既に彼の心の奥深くに入り込み、その思索を強く左右する存在ともなっていたのだ。だがこの時アリョーシャの視線が向かっていたのは、コーリヤの「エゴイスティックな自愛心と全くの我儘さ」、即ち「悪魔」と結びついた「悪戯心」や、それが産み出した偽りの「復活劇」よりも更に奥にある悪魔的な現実、つまりイリュージョン少年がスメルジャコフと共に犯した「ジューチカ事件」という悪魔の業と、その罪に対する赦しの可能性、言葉の真の意味での「復活」の問題だったと考えるべきであろう。

この問題を更に考えるために、またアリョーシャについての理解を更に深めるためにも、アリョーシャと悪魔の問題について、検討しておく必要があるだろう。

悪魔の夢、リーザとアリョーシャ

アリョーシャと「悪魔」。この問題を考えるために、彼とリーザとの最後の対話に目を向けてみよう。先に見た、スネギリョフ家訪問から帰ったアリョーシャがリーザと交わした対話（五1）ではない。この対話から二か月後の裁判の前日、既に婚約を解消した二人が正面からの対話、というよりは対決を繰り広げる場面である（十一3、この「対決」の詳細については拙著『カラマーゾフの兄弟論』I・VIIIを参照）。その終わり近くのことだ、リーザは自分が時々見るとい^{チョコレート}う悪魔の夢について語り出す。

「私は時々夢で悪魔たちを見るの。どうも真夜中みたい。私は蝋燭を持って部屋にいるの。すると突然至る所に悪魔たち。あらゆる片隅に、テーブルの下にも。ドアが開けられると悪魔たちはそこ、ドアの外にひしめいていて、入ってきて私を捕まえようと思っているの。そしてずっと近寄ってきて、今にも私を捕まえそうになるの。ところが突然私は十字を切ってやる。すると悪魔たちはみな後ずさりをするの。怖がっているのよ。ただ完全には退散しないで、ドアの所や片隅に立って待ち構えているの。突然私は神さまの悪口を大声で言ってやりたくなる。そして実際悪口を言い始めるの。すると突然彼らはひしめき合って私の方に向かって来るの。とても喜んで。そしてまた私を捕まえようとするの。ところが突然私はまた十字を切ってやる。すると彼らはみな後ずさりをするの。恐ろしいほど楽しい、息も詰まりそうなくらいよ」（十一3）

アリョーシャの悪魔

この告白を聞いたアリョーシャから、驚くべき言葉が飛び出してくる。「僕もまた、それと全く同じ夢をよく見ていました」。アリョーシャがこの夢を「よく見ていた」のは、果たしていつ頃のことなのか。今度は、二人のあの二か月前の会話に戻ろう（本章4）。リーザから、二人の再会以来「言い知れぬ不安と悲しみ」の内にあるようだと指摘され、アリョーシャが彼女に打ち明けたのは、彼を捕らえる様々な不安であった。父や兄たちに迫る悲劇への不安。自らの内で激しく胎動を始めた「地上的で、凶暴な、むきだしの力」たる「カラマーゾフの力」への不安（「この力の上にも神の霊が働いているのか、それさえ僕には分かりません」）。差し迫る長老の死への不安と悲しみ。そして神への信の揺れに対する不安（「僕は、ひょっとすると神を信じていないかもしれないのです」）。

ゾシマ長老の死はアリョーシャがこの不安を表明した夜のことである。それから三日して僧院を出たアリョーシャは、長老の命に従い一人俗世における「実行的な愛」の生を開始する。アリョーシャの心に、この不安がいよいよ具体的な夢の形をとって現れ出たと考えても何ら不思議はない。長老の死とその腐臭の醜聞によって、「一本の葱」の授受と「ガリラヤのカナ」の夢、そして満天の星空の下での神の現前という見事な一連の宗教体験（七

3-4) を与えられたアリョーシャの心が、その一方で悪魔たちを前に「神さまの悪口を大声で」叫ぶ夢の舞台ともなっていたのだ。作者ドストエフスキイはアリョーシャを「根本的ないわば自然発生的な信」の人とし、更には「一切か、無か」の排中律の精神を以って出家させ、イエスの呼び声に応えさせたのであった。このドストエフスキイが主人公を不動の「ロシアの小僧っ子」となるまでに成長させ、やがてゾシマ長老に代わり「キリストの御姿」を守る「生涯変わることなき戦士」(七4)として世に立たせるまでに、彼に歩ませる道は険しく、また限りなく長い。

さてこの「悪魔」という角度から見る時、我々は作者ドストエフスキイが「天使」たるアリョーシャを、様々な場面で様々な悪魔たちの前に曝していることに気づかされるであろう。—— イワンが語る「大審問官」の劇詩。ここでアリョーシャは、荒野におけるイエスの「悪魔の誘惑」と正面から対峙させられる(五5)。また公判前夜、自らの内なる悪魔との対決によって錯乱状態に陥ったイワンを必死で宥め、鎮めるのもアリョーシャである(十一10)。その直後の神への祈りにおいて、イワンに取り憑いた悪魔に対する神の勝利を確信したアリョーシャが、これとは対照的に言い表すスメルジャコフとは、「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼす」に至った悲劇の人である。そしてこの「信じていないもの」という言葉でアリョーシャが意味するものとは、悪魔以外の何ものでもないだろう(十一10)。またドミートリイから彼は、人間の心とは美を挟んで神と悪魔とが争う戦場であると説かれ、自らの内に激しく動き始めた「カラマーゾフの血」への不安と懼れを掻き立てられる(三3)。また修道院において、彼の師ゾシマ長老に敵対する修道僧はフェラポントであるが、この苦行修道僧が見る奇怪な幻影や悪魔たちは、人の心を震撼させる強烈なリアリティで迫るものがある。アリョーシャは修道院のこの現実にも触れていたのだ

神への信と愛の人アリョーシャにとって、悪魔は決して無縁な存在ではない。イワンと同じく、彼が究極の「肯定」に至る上で、それは対決の不可避な「否定」としてリアルな存在なのだ。ドストエフスキイのリアリズムが刻むアリョーシャの魂のこの振幅と奥行きを踏まえ、我々は再びイリュージョンとその罪意識を見つめる彼の許に戻ることにしよう。

アリョーシャが見つめる二人の罪人、イリュージョンとスメルジャコフ

悪魔について言及したアリョーシャ。繰返しとなるが、この時彼が見据えていたのは、コーリヤを捕らえた「自愛心」という名の悪魔だけではなく、むしろそれを超えてイリュージョン少年を捕らえた悪魔、彼をジューチカ事件に追いやった悪魔であったと考えるべきであろう。更には言えば、これもまた繰返しとなるが、この時アリョーシャの視野の内には、イリュージョンと共にスメルジャコフも捕らえられていたと考えるべきであろう。イリュージョンとスメルジャコフ、これら二人の「罪なくして涙する幼な子」たちは、共に運命の理不尽さと醜悪さに対する怒りと呪いから魂を悪魔に譲り渡し、運命への復讐を「一線の踏み越え」によって遂行してしまったのだ。前者は父親フォードル殺しという形で、後

者はジューチカ殺しという形で。アリョーシャが向き合っていたのは、これら悪魔に捕らえられた二人の罪人であり、その罪に対する「悪業への懲罰」に苦しむ青年と少年だったと言えよう。悪魔たちの前で「大声で」神を罵るといふ神聖冒涇の夢を見るアリョーシャ、彼がこの自らの姿を、悪魔たちの前でジューチカにピン入りのパンを呑み込ませるイリュージョンとスメルジャコフの姿と重ねていたとしても何らおかしくはない。アリョーシャが見つめるのは、悪魔の業によってイリュージョンとスメルジャコフが放り込まれた罪意識の地獄であり、そしてこの罪意識から如何にして彼らが解き放たれるかの問題だったのだ。かくして「罪なくして涙する幼な子」の問題は、その「幼な子」たち自身の根源的罪性と、それに対する赦しの問題という複雑かつ深刻な相貌を帯びて立ち現れてくる。スメルジャコフの罪と赦しの問題、その死を超えた「永遠の生命」については、最終回の第6章で改めて考えることにし、今回はイリュージョンの罪意識に焦点を絞ろう。

罪と赦し、そして死を超えた「永遠の生命」

アリョーシャは果たしてこの問題を解いたのであるだろうか。そうだとすれば如何にして。——この問いに対する答えを示す具体的な場面も言葉も、作品中に直接は見当たらないように思われる。コーリヤが試みた復活劇、イリュージョンを罪意識の地獄から救い出そうとする試みは、先に見たように、一瞬イリュージョンを歓喜で打ち震わせはしたものの、彼を救うどころか、むしろその罪意識を一層掻き立て、死期を早めさせてしまっただけであった。コーリヤの「感傷的な」「芝居」を叱責したアリョーシャ自身もまた、イリュージョンを罪意識の底から救い出すような答えを見出すことは出来ず、日々少年たちとイリュージョンの傍らに寄り添い続けていただけのように見える。先にも見たように、「死の床」にあるイリュージョンが父親に向かい、「パパ、僕が病気になったのはね、僕があの時ジューチカを殺したからなんだよ、神様が罰を下したからなんだよ」、こう涙ながらに語るのを三度も聞かねばならなかったアリョーシャは、少年の傍らでなす術もなかったと言わざるを得ないように思われる。

だがそうだろうか。ドストエフスキイは正にこの事実、つまりアリョーシャが少年たちと共に日々イリュージョンの許を訪れ、彼の傍らに寄り添い続けることの内に、この問題に対する答えを提示しているのではないだろうか。『罪と罰』におけるマルメラードフ復活の描写以来、ドストエフスキイのリアリズムが我々に示す罪人の救いとは、決して天使たちの登場とか天来の声の轟きとか死せる肉体の聖体への変貌とかいう、華々しい場面の描写を以って提示されることはなく、ただ二つのことを絶対的条件として描かれてきたと言えよう。つまりまずは当事者の内なる痛切な罪意識の存在と、その罪人に寄り添う人間の内に燃える愛、これら二つである。これら二つの絶対的条件の下に、ドストエフスキイは罪に沈んだ人間の復活を、日常の平凡な詳細の中にいつの間にか差し込む一条の光として、または彼らが流す涙や血の上に映し出される微光として表現してきたのである（拙著『罪と罰における復活—ドストエフスキイと聖書—』を参照）。イリュージョンの場合にもドスト

エフスキイは、アリョーシャたちに罪意識に苦しむこの少年を日々訪れさせ、その「死の床」に寄り添わせ続けるという事実の内に、これら二つの絶対的条件を描き込んでいると考えられる。イリュージシンの痛切な罪意識と、彼に寄り添うアリョーシャや少年たちの愛である。彼はこの単純な事実こそが、ゾシマ長老がアリョーシャに託した「実行的な愛」の行為そのものであり、「一本の葱」の授受に他ならないと考えたのであろう。

「ガリラヤのカナ」の祝宴において、ゾシマ長老がアリョーシャに語りかけた言葉を再度確認しておこう。

「・・・我らの仕事はどうなっている？ もの静かでおとなしい私の少年よ、お前も今日餓^{かつ}えた女に一本の葱を与えることが出来た。始めるのだ、倅よ、自分の仕事を始めるのだ。おとなしい少年よ！ 我らの太陽が見えるか、お前にはあのお方が見えるか？」（七4）

長老の言う「一本の葱」。それをアリョーシャは日々少年たちと共にスネギリョフ家を訪れ、「死の床」に沈んだイリュージシンの傍らに寄り添い続けることで与えたのだ。この少年に指を噛み砕かれた時、穏やかな眼差しでアリョーシャは語りかけたのであった。「さあ、これで十分だね？」。この言葉こそ彼が少年に与えた最初の「一本の葱」だったのだ。イリュージシン少年に寄り添うもう一人の「物静かでおとなしい私の少年」アリョーシャ、彼に「一本の葱」を託したのはゾシマ長老であり、また長老に直接「一本の葱」を託したのは兄のマルケルであり、その遙か遠くの出発点には「ガリラヤのカナ」の祝宴の中心に座す「我らの太陽」の存在があることを忘れてはならない。言い換えればドストエフスキイは、これら「一本の葱」を伝える人々の心の内に燃えるのは愛であり、それは「我らの太陽」が十字架の上から発する炎に由来するものであることを「ガリラヤのカナ」において指し示したのだ。この炎がアリョーシャや少年たちを介して痛切な罪意識に沈むイリュージシンに伝えられたと考える時に初めて、我々はこの少年を、痛ましい死を超えた「永遠の生命」の内に捕らえることが可能となるであろう。

『カラマーゾフの兄弟』の最後に置かれたアリョーシャの「告別説教」。これは何よりもまずは人間にとって何が「素晴らしい永遠の思い出」となるのかについて、この青年が少年たちに贈る励ましの言葉だと言えよう。そしてその背後にあるのは「死の床」にあるイワンと、監獄にあるドミートリイと、そして自ら命を絶ったスメルジャコフ、これら「一本の葱」とは遠い不幸な兄弟たちに対するアリョーシャの痛恨の思いの表白でもある。同時にこれはゾシマ長老が指し示す「我らの太陽」を向こうに置いて、新たな旅に乗り出すアリョーシャが自らに言い聞かせる訓戒^{いましめ}の言葉、あるいはその旅に携えるべき杖でもあると考えられる。最後にこの「告別説教」が持つ意味と奥行きについて検討し、本章を終えることにしよう。

6. アリョーシャの告別説教 —死からの復活の条件—

別れの言葉

『カラマーゾフの兄弟』前篇の終局（エピローグ3）、イリュージン少年の葬儀と埋葬の後、町外れのあの「大きな石」の前に立ったアリョーシャは、十二人ほどの少年たちに対し、二人の兄の不幸について、そして自らの長い不在・別離について告げる。続いて彼は亡きイリュージン少年に言及し、全員がこの少年との交流を「素晴らしい永遠の思い出」として心に留めておくことを、そしてそのことで末永く互いに「友」としての結びつきを保ち続けることを訴える。これを受けて、コーリヤが先頭を切って上げるのは「カラマーゾフ、^{ウラー}万歳！」の叫びだ。読者の誰もが胸を打たれる感動的な終局である。

だが我々はアリョーシャの別れの言葉を、その背後にある様々な事実と問題を捨象して、ただ単に幼時期の美しい幸福な思い出が人間にとって不可欠であるという、あるいは人間の成長における家庭の重要性の宣揚という、センチメンタルで旧守的道德主義的な方向にのみ受け取ってはならないであろう。また少年たちの数が「十二」であることから、イリュージンが愛した「大きな石」の前に立つアリョーシャをイエスとみなし、彼が少年たちに語りかける別れの言葉を、イエスの十二弟子に対する「告別説教」（ヨハネ十一-十四）であると取ったとしても、これだけではただ単に『カラマーゾフの兄弟』と聖書的磁場とを重ね合わせるというロマンチックでペダンチックな思い付きの域を出ないであろう。そもそも人間にとって何が「素晴らしい永遠の思い出」となるのか、このことについて語り出したアリョーシャの魂を揺るがした「激震」を理解しない限り、彼の別れの言葉は我々の胸にただ虚ろに美しく響くだけであろう。

「大きな石」の前での「激震」

アリョーシャの別れの言葉を検討するにあたり、まず注意を払う必要があるのは、彼がこの言葉を前以って用意はしていなかったという事実である。イリュージンの葬儀と埋葬とが終わり、晩の追善供養までの間、残された家族が心ゆくまで悲しみに浸れるようにと、アリョーシャと少年たちは外に出る。そしてイリュージンとスネギリョフとが散歩していた小径を歩いていた時のことである。彼らが町外れの放牧場を区切る生垣の傍らにある「大きな石」の前に行き当たるや、スムーロフ少年が叫び声を上げる。「イリュージンの石だよ。[父親のスネギリョフが彼を] 葬ってあげたいと言っていた石だよ！」。注意すべきは筆者が、この大きな石を見つめるアリョーシャについて、次のように記すことだ。

「全員が無言のまま、この大きな石のところで立ち止まった。アリョーシャは石に目をやった。するといつかスネギリョフが語ったことの全光景が、一挙に彼の記

憶に甦ってくるのであった。つまりイリューシンが泣きながら父親に抱きつき、「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう!」、こう叫んだ時の光景である。彼の魂の中で、何か激震が走ったかのようにだった。彼は真剣で厳肅な眼差しで、イリューシンの同僚である小学生たちの可愛らしく明るい顔の全てに目をやり、突然彼らにこう語りかけたのである。「皆さん、僕は皆さんにここで、正にこの場所で、一言お話をしたいと思います」(エピローグ3)

「彼の魂の中で、何か激震が走ったかのようにだった」。筆者が用いた「激震が走る」という動詞の根にある「激震」とは、「激しく揺さぶること」「激しく震え動かすこと」という意味の名詞で、ロシア語ではこれを語根として様々な激しい動詞が作られ、それらは『カラマーゾフの兄弟』において最も特徴的な語群を形成するものである。先に挙げた「激情の噴出」と同じく、この「激震」という語によって主人公たちの魂の動揺や震撼や激変が指し示され、新たな絶望と覚醒に向けた激しいドラマが展開するのである。

「イリューシンの石」の前に立ち、アリョーシャの魂の中で起こった「激震」。——「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう!」、イリューシンが「涙で震えながら」父に向かって叫んだこの叫びが、突然アリョーシャの魂に甦り、「激震」を走らせたのである。アリョーシャの「告別説教」を導き出したのはこの少年の叫びであり、それは少年の死後もなお彼の胸を突き刺し続ける痛みであったのだ。

注意すべきはこの時、アリョーシャの内で長兄ドミートリイが思い起こされていることだ。イリューシンの叫びにある「あいつ」とは、ドミートリイに他ならない。アリョーシャの内にはこの時、改めて兄ドミートリイの恥ずべき振る舞いが甦り、彼の魂は激しい痛みに刺し貫かれたのだ。イリューシンが葬られた今、そして父スネギリョフと家族全員が悲しみの底に突き落とされている今、「あいつ」ドミートリイはこの悲しみを何処で、そしてまた如何に受け止めているのか。

この場面に先立って筆者が記すのは、カチェリーナ訪問に続き、囚人病棟のドミートリイの許を訪れたアリョーシャについてである(エピローグ1・2)。二か月前、スメルジャコフが入れられていた小さな個室、ここでドミートリイとカチェリーナとグルーシェニカとの間で繰り広げられた愛と嫉妬のドラマについては省略しよう。我々が目を向けるべきはこの時、兄ドミートリイに対してアリョーシャが下した厳しい宣告である。ドミートリイは懲役二十年の流刑を宣告され、シベリヤ送りがいよいよ現実のものとなるや、既に始まった看守の「貴様呼ばわり」に耐えられず、イワンが密かに謀った護送途上での脱走と、グルーシェニカを伴ったアメリカ逃亡のことを口に始めていた。この兄にアリョーシャは宣告を下したのである。

「兄さんには、心の用意が出来ていません。十字架を負うことはまだ無理です」

(エピローグ2)

スメルジャコフの自死を見て見ぬふりをして立ち去ってしまったのはイワンであった。このスメルジャコフに対して、ドミートリイが一貫して示すのもまた軽蔑でしかない。同じくドミートリイがスネギリョフに対して示すのも、時に自らの振る舞いに対する後悔の情を口にするとはいえ、一貫して無関心でしかない。更にまたドミートリイは、自分に追いつがって泣きながら父の赦しを請うたイリュージンが受けた心の傷について、そしてこの少年の「死の床」の傍らにアリョーシャや少年たちが寄り添い続けたことについて、更にまたこの少年が傷心の内に迎えた痛ましい死についても、些かでも関心を示した形跡はないのだ。

「十字架を負うことはまだ無理です」。このアリョーシャの宣告とは、直接は父親殺しの冤罪という重荷を担う意思も力もない兄に対する冷静な観察と配慮からなされた宣告であったと言えよう。だがそれは同時に、世に満ちる不幸な「餓鬼」たちのために生きることを熱く宣言しながら(次回第5章)、目の前の不幸な人々には一切関心を示さない「若旦那」ドミートリイ、彼らに対して自らが犯した「罪」に対する自覚さえ持たない「卑劣漢」ドミートリイを十字架の前に置き、彼に対して下した宣告でもあったのだ。ジューチカの復活劇を仕組んだ少年コーリヤに対する厳しい言葉に次いで、これは他人を批判することも裁くこともない「天使」アリョーシャが下した、恐らくは最も厳しく冷徹な宣告とすべきものであろう。「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう!」。死の向こうに去った少年のこの叫びは、ドミートリイに代わってアリョーシャの内で止むことなく鳴り響き、彼の魂を突き刺し続けていたのだ。その延長線上にあったのが「イリュージンの石」の前での魂の「激震」であり、これがアリョーシャを石の前に進み出させ、「告別説教」を促したのだと考えるべきであろう。ドミートリイの光と闇については、次回第5章で改めて扱わなければならない。

さてアリョーシャは葬儀の前、既にコーリヤの問いに答えて、父親を殺したのはドミートリイではなく下男のスメルジャコフであると告げている。しかし彼はこの事実のみを告げるだけで、それ以上は何も語らない。そもそも少年コーリヤの関心は専ら「真実のために己を犠牲にした」ドミートリイとその受難の英雄性にのみ向かい、その心をスメルジャコフに対して向けることはないのだ。更に注意すべきことにアリョーシャは、「告別説教」の冒頭で少年たちに向かい、ドミートリイが流刑されること、イワンが「死の床」にあること、そして自分はこの町を去り、非常に長い間少年たちと別れることになることと告げるのだが、それらはどれもがみな事実そのものについてのごく短い報告でしかない。これら三人の兄たちの不幸について詳細を語るには、少年たちはまだ余りにも幼く、またアリョーシャの心はなお余りにも痛み続けていたのであろう。少年たちに兄たちの罪のことを語るよりも、アリョーシャは何よりもまず少年たちの心を「素晴らしい永遠の思い出」と共に、「光」に向かわせたかったのであろう。

その「告別説教」においてアリョーシャは何を語ったのか。

痛みに寄り添う愛の一体感

「イリュージョンの石」の上で「突然」アリョーシャが語り出した言葉。そこには「垢すりへちま事件」が孕む痛切な痛みと悲しみが存在し、このことでアリョーシャの魂が揺り動かされたのであることが明らかとなった。続くアリョーシャの言葉に耳を傾けてみよう。

「皆さん、このイリュージョンの石の傍らで、僕たちはまずイリュージョンのことを、次にお互いに皆のことを、決して忘れないと約束をしましょう。これからの人生で僕たちの身にたとえ何が起ころうとも、たとえこれから二十年も会えないとしても、僕たちは一人の気の毒な少年を葬ったことを忘れないようにしましょう。覚えているでしょう。この少年はかつて、あの橋のもとで石を投げられていたのに、その後では皆さんにこんなにも愛されたのです。立派な少年でした。親切で勇敢な少年でした。父親の名誉と辛い恥辱を感じ取り、そのために立ち上がったのでした」(エピローグ3)

「そんなわけで、皆さん、何よりもまず、僕らの生涯全てを通して、彼のことを憶えていましょう。そしてたとえ僕らがこの上なく重大な仕事で忙しくとも、榮譽を勝ち得たとしても、あるいはどんなに大きな不幸に陥ったとしても、それでも今後次のことを決して忘れてはいけません。—— かつてここで、僕たちはみんな一緒に、立派で善良な感情で結ばれ、素晴らしい時を過ごしたということ。そしてこの感情が、僕たちが気の毒な少年に愛を寄せている間に、僕たちを実際の僕たち以上に優れた人間にしてくれたということ」(同上)

アリョーシャは少年たちに、イリュージョンのことをただ記憶に留めて置くようにと訴えているのではない。彼が強調するのは、少年たちがイリュージョン少年に「愛を寄せていた」こと、このことのかげがえのなさである。そしてこの「気の毒な」イリュージョン少年に「愛を寄せていた」時とは、アリョーシャによれば、たとえそれがイリュージョン本人にとってもまた皆にとっても、少年の不幸と痛み自体を消し去ることは出来なかったとしても、全員が愛による一体感で結ばれた時だったのだ。そしてこの痛みに寄り添う愛の一体感こそ、やがて彼らに自らが「立派で善良」であり、「実際以上に優れた人間」であったことを感じさせ、ひいては彼らの内にイリュージョンの「永遠の思い出」を生き続けさせることとなるであろう。—— これはアリョーシャによる新たな「実行的な愛」の定義そのものであり、また少年たちの未来に向けて発せられた「実行的な愛」の勧めに他ならない。十字架上のイエスからゾシマ長老へ。ゾシマ長老からアリョーシャへ。そしてアリョーシャから少年たちへ。死を超えた「永遠の生命」を可能とする「実行的な愛」のバトンの受け渡しが、ここになされたのである。この意味でアリョーシャの別れの言葉とは、正にヨハネ福音書が

伝えるイエスの「告別説教」と重なるものと言えるであろう。

罪の自覚から十字架の覚悟へ

最後にもう一度確認をしておこう。「父親の名誉と辛い侮辱」のために命懸けで立ち上がった「あの気の毒な少年」イリュージンとは、ジューチカにピンを呑み込ませて死に追いやってしまったと苦しむイリュージンでもあったという事実である。つまり「垢すりへちま事件」の被害者であるイリュージンは、その前に「ジューチカ事件」においては残酷な加害者であり、この少年の心の中では「垢すりへちま事件」の悲しみの更に奥で、また更に強く、「ジューチカ事件」についての罪意識が疼き続けていたのである。「死の床」にあるイリュージンにおける悪魔性と悲劇性。「垢すりへちま事件」によって魂を震撼させられたアリョーシャが、同時にこの「ジューチカ事件」について思いを馳せていなかったと考えることは不可能である。先に見たように、リーザと同じく自らも悪魔たちを前にして「大声で」神の悪口を叫ぶ夢さえ見ていたアリョーシャは、イリュージンを捕らえた悪魔をも見据え、その罪意識の地獄を理解し、それゆえにこそ日々少年たちと共にイリュージンの許を訪れ、その「死の床」に寄り添い続けていたのだ。そしてこのことが彼に出来る唯一の「実行的な愛」の実践だったのである。

アリョーシャは「イリュージンの石」の前において、「ジューチカ事件」について言及することは無い。彼の前に立つ少年たちもまた、一時は「垢すりへちま」と囃し立ててイリュージンを嘲笑し、また石を投げて虐めるという残酷さに酔う存在であり、悪魔に心を譲り渡した「あいつ」たちだったのだ。だがアリョーシャは、この小悪魔たる少年たちを既にイリュージンと和解させていたのである。そして彼らは少年の痛みを自らの痛みとし、その死に至るまで寄り添い続けたのだ。彼らは「気の毒な少年に愛を傾け」、一つになったのだ。

先に見たように、アリョーシャにとっては、イリュージンに寄り添い続けた級友たちの存在と愛の一体感こそが、イリュージンがその罪意識の地獄から解き放たれ、死を超えた「永遠の生命」の内に摂取されることを可能とする絶対的条件だったのである。アリョーシャが語る「思い出」の永遠性とは、「あの気の毒な少年に愛を傾け」、皆が痛みの中で一つになったところ、つまり全員が共にそれぞれの十字架の苦しみを担ったところに差し込む光の感覚だったのだ。

コーリヤの「復活」への展望

アリョーシャによって指し示された光の感覚の中で、感動の涙と共にコーリヤが叫ぶ。

「僕らは皆、死の世界から立ち上がり、復活して、互いに皆と、イリュージンとも再会できると宗教は言いますが、本当でしょうか？」(エピローグ3)

イリュージョンのためにジューチカをペレズヴォンに生まれ変わらせるという、あの微笑ましくも罪深い復活劇を仕組んだ少年コーリヤの、このあたりが復活についての実際の認識であり、彼には未だ確かなことは何も分かってはいないのだ。だがアリョーシャはこの少年に対して丁寧に、しかも真正面から真摯な答えを返してやる。

「必ず復活しますとも。必ず再会して、皆がそれまでのことをお互いに楽しく、喜ばしく語り合うのです」(同上)

感激したコーリヤと、これに和した少年たちの「カラマーゾフ、万歳！」の叫びを以って作品の前篇は終わる。恐らく生命力と知力に満ち溢れた未完成体の少年コーリヤは、書かれずに終わった後篇において、アリョーシャと他の少年たちとの交流の中で、なおその「素晴らしい天性」と「若い心に芽生える芸術的欲求」とを起動力として、「悪戯心」に満ちた大きな悲劇的物語を紡ぎ、その絶望と苦しみと悲しみの中から彼自身の新たな「復活劇」を紡いでゆくのであろう。

取り敢えず我々は、「告別説教」の内に含まれた問題を幾つか浮き彫りにし、人間にとって何が「素晴らしい永遠の思い出」となるかについて、アリョーシャに即して二つの絶対的条件を明らかにした。この認識と愛の透徹こそが、冒頭で記した彼の「強さ」であることを確認し、本章を終えることにしよう。

(第4章、了)